「琉球文学」資料注釈4
『浮縄雅文集』上　蕉雨亭

島村幸一・小此木敏明・屋良健一郎・綱川恵美

〈凡例〉

・〈本文〉は、沖縄県立図書館東恩納文庫所蔵『浮縄雅文集』を底本にしている。ただし、文集の冒頭にある「雨夜物語」は、既に「「琉球文学」資料注釈2『雨夜物語』『永峯和文』」で取り上げており、省略している。したがって、注釈は「那覇の入江の名所づくし」から始め、それを二とした。

・『浮縄雅文集』上では二から十五までを掲載し、十六から二十九は下に譲る。各話の担当は、二・五・十・十三を島村幸一、三・七・十四を小此木敏明、四・八・十二を屋良健一郎、六・九・十一・十五を綱川恵美とした。

・〈本文〉は、新字体でおこし、適宜、句読点、濁点を付している。また、必要な場合は（　）を付して脇に読みを現代仮名遣いで記した。

・国王等に対する闕字がある場合は、一字開けている。また、脱字等の闕字については原則として〔　〕で示し、欠落が推定できる場合は〔　〕の中に示した。

・〈注釈〉にあたっては、以下の書に略称を用いた。『琉球国由来記』は『由来記』、『日本歴史地名大系　沖縄県の地名』は『地名大系』、『沖縄大百科事典』は『大百科』とした。また、琉歌については、『琉歌大成』から引いている。

・『浮縄雅文集』を注釈するにあたり、照屋亜季奈氏が琉球大学に提出した卒業論文「『浮縄雅文集』翻刻と注釈」を参照している。参照する際は、「照屋論文」として示した。

（島村幸一）

二

〈本文〉

那覇の入江の名所づくし

玉城親方[1]

浮世は牛の小車の、めぐりて爰に来てみれば、実に面白や、名にしあふ[3]、なはの入江の其気色。こま唐土や日の本の、八十嶋船の数見えて[4]、追手の風に皆船の、「ゑ[6]ひさらや、さらや、さらばや」と、沖をはるかにやらざ森[7]、けいや慶良間や久米嶋や粟国渡名喜も三重城[8]、橋を逍(たど)れは沖の寺[9]、宮井久しき神垣[10]や、神の納受はおのづから[11]、心も爰に住吉の[12]、岸による波よるさ〔へや〕と、よそめかずそふあみや崎[13]、在原寺の跡しめて[14]、名計にほふ垣花(かきのはな)[15]、南をはるかに詠むれば[16]、霞の内に布さらす[17]、天津空なる乙女子が、わざかと計うたがわる、是落平(うてぃんだ)[18]の瀧とかや、世々に流て呉竹の、替ぬ色は幾廻り、君の恵みに逢の山[19]、誰も千年をいはふ崎[20]、汲ど尽せぬ湧田(わくた)の里[21]、泉崎とや是やらん[22]。花の名立る中嶋を、見物城(みものぐすく)は皆人の[23]、袖をつらねて通堂(とんどう)や[24]、行か戻るか思案ばし[25]、かりの浮世は渡地(わたんじ)の[26]、里にもはやく[27]、着にけり[28]。

〈口語訳〉

那覇の入江の名所尽

玉城親方

辛い浮き世を、牛が引く小車で巡り巡ってここに来てみると、実にすばらしいよ、有名な那覇の入り江のその眺めは。朝鮮や中国、日本の船々が多く見えて、順風のもとすべての船は「えいさらや、さらや、さらばや」と、早くも沖をはるかに走っていて、屋良座杜グスク、チー干瀬、慶良間や久米島、粟国・渡名喜も見える三重グスクがある。橋をたどっていくと沖の寺（沖の権臨海寺）があり、社は歳月を経ていて斎垣に囲まれ、神仏への願いは自ずとかなえられ、心安らに住み良い住吉の岸に寄る波が寄るその夜さえも、人目が多く賑わう網屋崎、そこにある在原寺の跡に思いひたり、花はなく名ばかり香る垣花に来て、南を遠く見渡すと、霞の中に布を晒す天女の技ではないかと疑われる落平の瀧とかいうのはこれだろうか。瀧は、世々に渡って流れ、呉竹のように変わらず幾年月も国王の恵みにあう奥武山、誰でもが国王の千年の長寿を祝う硫黄グスク、汲んでも尽きない湧田の里の泉にちなむ泉崎とは、これだろう。恋の浮き名が立つ仲島を、見たいものだと見物グスクに皆が袖を連ねて通る通堂を過ぎ、行くか戻るか思案のしどころである思案橋を、仮の浮き世とばかり渡って渡地の里に早くも着いた。

〈注釈〉

1　**玉城親方**　『那覇市制七十五周年　詩歌集　那覇を詠う』では、組踊の創始者と考えられている向受祐玉城朝薫（一六八四～一七三四年）としている。玉城親方が朝薫とすると、朝薫は那覇港浚渫工事の奉行を康熙五十六年（一七一七）にしている。　2　**浮世は牛の小車**　「牛」は「憂し」が掛けられている。小車とめぐるは、縁語の関係。「牛の車」が詠まれる和歌がある。　3　**名にしあふ**　本来は「名にしおふ」である。有名であるの意。「し」は強意の助詞。　4　**なはの入江**　那覇港のこと。オモロでは那覇は「うきしま」（浮島）と呼ばれ、那覇港は「なはどまり」「なはみなと」と謡われている。那覇は十五世紀半ばに長虹堤が築かれ、十六世紀半ば頃に屋良座森城と三重城の突堤が築かれ、王国の港として整備された。　5　**こま唐土や日の本の、八十嶋船の数見えて**　「こま」は高麗で朝鮮のこと。朝鮮や中国、日本の多くの船が那覇港の入っている様子をいっている。ほかの資料でも、古琉球期の那覇港の様子は、『おもろさうし』第十三―七五三は「唐（たう）　南（な）蛮（ばん）　寄（よ）り合（や）う　那覇泊（なはどまり）」、『琉球神道記』「序」は「唐山・倭国・朝鮮・南蛮之商客之所（ガ）レ到ス也」、『海東諸国紀』の「琉球国之図」には「那波港」「津口　江南、南蛮、日本商舶船所」とある。また、近世期の絵図「琉球貿易図屏風」（滋賀大学経済学部附属史料館蔵）等には接貢船（唐船）、帰唐船（唐船）、島津の家紋が付けられた薩摩船（和船）が描かれている。　6　**追手の風**　追い風のこと。艫（船尾）から吹く風。順風。　7　**「ゑひさらや、さらや、さらばや」と**　「ゑひさら」は物を押したり引っ張ったりする時の掛け声。ここでは、帆を揚げる時の掛け声。虎明本狂言・千鳥「ゑいさらゑいさらと仰られひ心得た、ゑひさらゑひさら」とある。「さらや」も掛け声か。「さらばや」は別れの挨拶。琉歌に「二〇五一　さらばさらばと　思へども　引かされて行きゆる　我身の肝や」（別れよう別れようと思うが、引かれるていく私の心は）。また「さらはやと」の「はや」は早の意もあり、次の詞章早くも沖にという意味をも示している。　8　**やらざ森**　屋良座森グスクのこと。「那覇港口の南側に設けられた海上防衛の砲台で、北の砲台である三重城と対応する。尚清王時代の嘉靖三〇年（一五五一）三月五日に海神が現れ、一〇月二日より石普請が始まったと伝え、二年後に完成した（「中山世鑑」巻五）」（『地名大系』）。「やらざ森」の「や

ら」は沖に遣らんの意も掛けている。　9　**けい**　「けい」は慶伊干瀬（ちーびし）。「那覇港の北西約一一キロに位置する三つのサンゴ礁（台礁）の総称。渡嘉敷村の前島に属する」（『地名大系』）。　10　**三重城**　「三重城」は「近世の西村南端の通堂から西の海中に岩礁をつないで延びた海中道路（臨海堤）先にあった城砦。那覇港口の北に位置し、古くは南の屋良座森グスクと対となって、港の防御を担っていた」（『地名大系』）。「三重城」は見えが掛けられている。周煌『琉球国志略』の琉球八景のひとつ「臨海潮声」にも描かれる。琉歌に「四一三五　三重城にのぼて　手巾持上げれば　走船のならひや　一目ど見ゆる」（三重城に上って手巾（ティサジ）を持ち上げて合図を送っても、順風を受けて走る船のためしとして一目しか見ることができなかった）、「四一三四　三重城にのぼて　打ち招く扇　またもめぐり来て　結ぶ御縁」（三重城に上って打ち招く扇は、また再会を約束する縁を結ぶよすがとなるものだ）と歌われる。三重城は那覇港から出る船を見送る場所である。　11　**沖の寺**　沖の権現臨海寺のこと。「近世には通堂から西の三重城に至る海中道路（臨海堤）の途中」にあった。方言でウーチヌティラといった（『地名大系』）。『琉球神道記』にも「洋（オキ）ノ権現臨海時」と記される。『由来記』巻十一には「沖山臨海寺」と記される。　12　**宮井久しき神垣**　「宮井」は宮居のことか。神が鎮座すること、神社、社のこと。「沖の寺」は権現であるので、このようにいったのか。「神垣」は、神社の周囲の垣。斎垣（いがき）、玉垣、瑞垣（みずがき）のこと。　13　**納受**　神仏が祈願を聞き入れること。　14　**住吉**　「王府時代の儀間村の北部をいう。北から東にかけて那覇港に面する。地名は住吉森に住吉大明神が鎮座したことによる」（『地名大系』）。「住吉」は住み良しが掛けられている。琉歌に「七六三浮世住吉の　松だいんす冬や　嵐吹く音ど　朝夕聞きゆる」（浮き世に住み良い住吉の松さえも、冬は嵐が吹く音を朝に夕に聞いているよ）と歌われる。琉歌には「浮世住吉」という表現が多くある。また、住吉は月の名所でもあり琉歌で多く歌われる。ただ、住吉と寄る波を歌った琉歌は『琉歌大成』には入っていない。『近世沖縄和歌集』に「八九七　住吉のむかしのきしにうちよせて　かへらぬなみは雪にやあらぬ」（川平朝重）がある。このことから「那覇の入江の名所つくし」は、和歌的教養が前提になっていることが窺える。　15　**よそめかずそふあみや崎**　「麻姓田名家家譜」に康熙三十七年（一六九八）のこととして「進貢唐船両艘造営於垣花網屋」がみえる（『地名大系』）。垣花にあった造船所（スラ場）を垣花網屋といったか。なお、「よそめ」の「め」（目）と「あみや崎」（網屋崎）の「あみ」とは縁語の関係。　16　**在原寺の跡しめて**　不明。「在原」の「在」は有りが掛けられている。「しめて」は、〈染む・浸む〉の接続形で深く感じて、心にしみての意。　17　**垣花**　那覇市垣花。儀間村発祥の地。儀間村は真和志間切に属したが、康熙十二年（一六七三）に小禄間切に所属した。　18　**霞の内に布さらす～落平の瀧**　「落平」は現在の奥武山公園の南側にある湧泉の落水地。方言ウティンダ、落平樋川と通称する。那覇に水道布設事業が始まる昭和初期まで、那覇港出入りの船舶や那覇市民の飲料水として用いられた（『地名大系』）。琉歌に「一〇一七　落平に通て　水取ゆる舟の　歌の面白さ　那覇の港」（落平に通って水を汲む舟の舟歌が赴き深く那覇の港に聞こえてくるよ）と歌われる。「落平の瀧」を「霞の内に布さらす」とするのは、『雨夜物語』（『大島筆記』所収）に「落平を見るに岩間伝（づた）ひに逸（そ）らせて流（なが）れ落（お）つる水は、白妙の布打（う）ち這（は）へて晒（さら）すかと見へて」と類似する表現である（「琉球文学」資料注釈2『雨夜物語』『永峯和文』」の『雨夜物語』十五の注3参照）。　19　**世々に流て呉竹の**　「世々」と「節々」が掛けられている。「世々」は「呉竹」の縁語。　20　**逢の山**　逢うは奥武山（おうのやま）の奥武を掛けている。袋中の『琉球往来』「桃日ノ礼ノ事」にも「思（オモ）ヒシ人ニ遇（アフ）ノ嶋」とあり、奥武山の「奥武」は逢うが掛けられている。奥武山は「那覇川中の小島。奥之山・

奥山などとも記された」、「島中、松が生い茂り、風光明媚の地であったため、しばしば御仮屋守や問役が薩摩鹿児島藩の在番奉行のお供で出かけていた」（『地名大系』）。　21　**いはふ崎**　祝うと硫黄がかけられている。硫黄崎は硫黄グスクのこと。「近世の渡地村東端に位置した岩山の城。往昔、中国への進貢の硫黄を貯蔵した所という。方音ではユーワーグスク」（『地名大系』）。　22　**湧田の里**　湧田（村）のこと。那覇の南東部に位置する。もと古波蔵村のうちで、十七世紀に泉崎村に移される（『地名大系』）。『由来記』巻八には、「和久田ノ後ニ、湧川トテ田ノ辺ニ井有。此井、水ノ能湧出ルニヨツテ湧川ト云。是ニヨリテ、其辺ノ田ヲバ皆、湧田トイヘケルガ、終ニハ里ノ名モ称シケルトナリ」とある。湧田村は陶工の村として知られる。　23　**泉崎**　那覇の東部に位置し、那覇四町（東町村、西町村、若狭町村、泉崎村）のひとつ。『由来記』巻八には、「此泉崎、元ハ宗部ト云ケルトゾ。爰ニ安室親方トテ、大福人在。此人ノ酒ハ、泉ノ湧出ガ如クニシテ、呑トモ尽キヌ云フココロニシテ、泉酒泉酒ト、人皆イヒナラハシケルガ、終ニハ泉崎ト改メ、村ノ名ニシケルトナリ」とある。「汲と尽せぬ湧田の里、泉崎とや是やらん」とは、湧田が泉崎村にあることをあらわしているか。また、「汲と尽せぬ湧田」は、『由来記』の湧田と泉崎の二つの地名譚をふまえているようにもみえる。　24　**花の名立る中嶋**　「中嶋」は那覇の南東部に位置する。泉崎村の籍内に属す。もとは小島だったようで、東側が陸橋で泉崎村と繋がっていた。「中嶋」へは泉崎村タナカスージ（田仲小路）の南端に架かる小橋で出入りしていた。「中嶋」は遊郭があり、『由来記』によれば、その成立は康熙十一年（一六七二）以降となるが、もともと船着場であった当地付近には娼妓屋が散在していたと考えられ、それを政策的に集めて遊郭としたと考えられる（『地名大系』）。「花の名立る」は、ここが遊郭であったことから来た表現。仲島は琉歌に数多く歌われている。「一八　暁の別れ　袖に波立てて　仲島の小橋　わたりぐれしや」（暁の別れは袖に波が立つほどで、仲島の小橋を渡りづらい）、「一八六　朝夕忘ららぬ　仲島の浦の　こひぢ積み渡す　舟の泊」（仲島の浦の泥土〈恋地が掛けられている。かす、沈殿物をグリという〉を積んで渡す舟の泊のことが、朝夕忘れられないよ）。　25　**見物城**　御物グスクのこと。那覇港中の小岩礁に築かれた公倉。『海東諸国紀』の琉球国之図には「宝庫」とある。『沖縄志』の那覇港図には「見物城」とある。『混効験集』にも「みものぐすく」とある。『由来記』巻八には「往昔、諸国通融ノ時、到来ノ宝物ヲ納御蔵」とある。「見物城」は見物（見て立派、見事）が掛けられている。　26　**袖をつらねて通堂**　「通堂」は、近世期の西村の南辺、那覇港に面し海中に突き出した通堂崎一帯をいう。通堂は迎恩亭の別称（『由来記』）、十七世紀初頭には既に用いられた（『喜安日記』）。冊封使渡来時、那覇港内に停泊する冊封船（冠船）から小舟で使節が通堂崎に登岸、迎恩亭で琉球の百官が出迎えた。後代、冊封使節の迎接の儀式は迎恩亭ではなく、別に臨時の木屋（天幕小屋）を建てて行った（『地名大系』）。通堂は通るが掛けられている。　27　**行か戻るか思案はし**　「思案はし」は、那覇東村と渡地村を結ぶ橋。渡地村にある遊里に通う人にちなんで付けられたとされる。琉歌には多く歌われる。「四七六　行くか戻るか思案橋　うち戻る年ど　百恨めしやる」（行こうか戻ろうか思案する思案橋、結局戻ってしまうのは年の故でたいへん恨めしいことだ）、「七四六　浮名流しの思案橋　誰ものけなゆる　人やをらぬ」（浮き名の流れる思案橋だが、誰もそれを逃れる人はいない）。　28　**かりの浮世は渡地の**　「渡地」は那覇東村の属村で、那覇の南東部に位置した小島。同村には中国への進貢船の係留地である唐船小堀や荒神堂、硫黄グスク、遊里があった。「浮世は渡地の」は、浮き世を渡ると地名の渡地が掛けられている。「浮世は渡地の」は、本文の冒頭部「浮世は牛の小車の」と対応している。すなわち、「浮世」を

わたるのと、那覇の名所をめぐることは対応するかたちになっている。

（島村幸一）

三

〈本文〉

[1]於御茶屋諸芸づくしの時

[2]豊川親方

抑、我[3]宇留真の国は、北[4]極の東南に当れるにや、陰[5]陽の気正しく、四[6]のときあらたに、寒暑も中和にかなひ、甚しき天[7]災地殃もなく、国土豊に、人物さかむにして、風俗すなほなりしゆへ、天[8]朝より守礼の邦と称美し給ふ。まさに当[9]今、先王の御掟を鑑にし給ひて、万[10]機の政おだやかに、国家に稼[11]穡をすゝむるを先とし、五[12]倫の道を以て本とし、高き卑きもひじりのみちを教へ給ひて、人[13]倫明らかなり。王侯より三[14]公大臣を初め三[15]五の長臣、いにしへの賢臣・忠士の跡を追給ひて、三[16]綱五常正敷（ただしく）、国家を補佐し、君令を守りて万民を撫育し給へば、四民[17]おの〳〵産業（かんか）をたのしみ、よろこび、鰥寡孤独（かんか）の窮民までも安住し、[18]山の奥・島のはてまで、波風静にして大に治れること、恐らくは五[19]風十雨の御世もかくぞ侍らんと、おろかなる心にもをしはかられ侍る。大和・唐土・わが朝の、いにしへ乱れし世には、昼夜干戈（かんか）を事とせるゆへ、野にふし山にとまりて、身をやすくせざる事は、五倫の道やぶれて仁[20]義すたれしゆへなり。かゝりし世には、聖賢の書は夢にも見ず成ぬとぞ、古[21]きふみにも見え侍ける。されば、むかしはさるためしも有けり。いま、かゝるめでたきこの御世に生れあひて、御恵みを受ること、かぎりなき幸にあらずや。是皆　大[22]君の御大徳より出て、おの〳〵生涯を安くせしこと、たとへていふべきことのはもなく、貴（たかき）もいやしきも、心力を王事に尽さんことを希ふ。かゝる御世にしあれば、修学堪能の士、競ひ起て、六[23]の芸術もいやましに、日々に新に月々にさかんなりしかば、寛[24]保の初のとし神無月の末、主[25]上、東苑に御幸ましまして、諸（もろもろ）の芸能を照覧あそばし、叡[26]感殊に厚く、「猶も所行を厲（はげま）すべし」との　御[27]諚を下され、いづれも有がたく歓悦し、御興を催せる糸竹管弦のしらべは、庭上にみち〳〵、万歳をとなふもろごゑは、玉殿に響きて、松[28]吹風も千秋楽を奏するかとぞ聞えける。まことに、済[29]さたる衆賢、君情によりて群り出て侍るものならんかし。

〈口語訳〉

御茶屋にて諸芸づくしの時

豊川親方（豊川正英）

そもそも、わが琉球国は、北極点の東南に当たっているからか、陰陽の気が正しく、四季がはっきりしており、寒さ暑さもかたよりなく釣り合い、大きな天地の災害もなく、国土が豊かで、人や物が活発で、風習が素朴であるため、（中国の）朝廷は礼法を守る国と賞賛なさる。まさに当代の琉球王（尚敬）は、先王のご命令を模範になさって、天下の政治はつつがなく、国家に農業を奨励することを始めとして、五倫の道を手本とし、身分の高い者や低い者にも、聖人の道をお教えになって、人としての道は明白である。（琉球の）王侯より三公の大臣をはじめ十五人の重臣は、古代の賢臣・忠士の事績を踏襲なさって、三綱五常の思想によって正しく国家を補佐し、君命を守って万民を慈しみお育てになるので、民衆はそれぞれの職業を楽しみ喜んで、寄る辺のない貧しい者たちまでも安全に居住し、山の奥地や島の果てまで、波風は静かで（もめごとなく）、よく治まっていることは、おそらく五風十雨の御世もこのような状態なのでしょうと、おろかな自分の心でも推察できます。日本や中国や我が琉球の、過去の乱れた世の中では、昼夜に合戦をもっぱらとしたため、（人々は）野に伏し山中に宿り、身

が安寧でなかったのは、五倫の道が破綻し、仁義がすたれてしまったためである。そのような世の中では、聖賢の書は夢の中でも読まなくなったと、古い文章にも見ることができます。まあ、昔はそのような例もあったようだ。今、このようなすばらしいご治世の下に生まれてご慈悲を受けることは、限りない幸せである。これは皆、尚敬王のご立派な徳より生じて、各自が生涯を穏やかに過ごすことは、たとえて言うべき言葉もなく（すばらしく）、身分の高い者も卑しいものも、心と力を王家に尽くしたいと願う。このような治世であれば、学問を修めた優秀な者が競い出て、六芸（礼儀・音楽・弓射・馬術・書写・計算）もますます活発で、日ごとに新しく、月ごとに盛んになったので、寛保元年（一七四一）の十月の末、尚敬王は東苑（御茶屋御殿）へ行幸おわしまして、もろもろの芸能をご照覧し、お褒めになることは特に甚だしく、「なおも稽古に励めよ」とのお言葉を下され、（六芸を披露した者たちは）皆ありがたいことと歓喜し、ご興を催させる音楽の旋律は、庭上に満ちあふれ、万歳を唱える人々の声は、玉殿に響いて、松を靡かす風も千秋楽を奏でるかのように聞こえた。本当に、威儀の盛んな多くの賢人は、君主の情けによって群がり出て、お仕えするものであるにちがいない。

〈注釈〉

1　**於御茶屋諸芸づくしの時**　「御茶屋」は王府の庭園。跡地は現那覇市首里崎山の南西の高台で、一万余坪の広さがあった。景勝地であり、冊封使や在番奉行の接待にも使われた他、国王が遊覧することもあった。造営は尚貞王代の一六七七年で、伊舎堂親方守浄が普請奉行とされる。一六八三年に、冊封使の汪楫の命名により東苑とも呼ばれるが、琉球では御茶屋御殿と称された。呼称の由来は、一六八二年に庭園内に建てられた茶亭によるとされる。当初、管理には剃髪し短衣を着た御茶屋当二名が置かれたが、一七三四年に御茶道一名・相付一名と、筆者二名に変更された（田名真之「東苑（御茶屋御殿）」）。本話の諸芸披露が行われたのは寛保元年（一七四一）十月の末（注26参照）。　2　**豊川親方**　豊川正英を指すとされる（『池宮正治著作選集3』）。もとは忠頼で、後に正英へと改めた。唐名は伊世奇。康熙二十八年（一六八九）生、乾隆三十五年（一七七〇）卒。八十一歳。康熙四十五年（一七〇六）二月に欹髻を結い、同四十九年（一七一〇）に家統を継ぎ、中城間切添石地頭職となる。同五十六年（一七一七）に年頭使の識名親方盛誠について薩摩に赴いた。その際に、北谷王子朝愛の命で島津家の祐筆日高治左衛門為一につき曽我流書札の伝授を受け、翌年に譲り文を得て帰国している。その後、御右筆主取や評定所主取の職をつとめたが、合わせて八度、日本や中国への旅役を勤めたことが評価され、乾隆十四年（一七四九）に紫冠をいただき親方となったが、添石親方では、末吉親方と同音になるため、同年に名を豊川に改めている。同二十五年（一七六〇）に御文書奉行に任ぜられ、薩摩に対する書翰法式の調査を命じられた。その成果として、同三十一年（一七六六）三月に編纂した『中山要案総論』一冊、『同要案集』十六冊、『同総目録』一冊、『古案集』二冊、『新撰要文集』二冊、『琉陽普通書礼記』一冊などを提出している。また同年九月には、御在番所で用いる口上書を編纂した（東恩納寛惇『六諭衍儀伝』、屋部憲次郎『伊姓安富祖家譜訳注』）。書翰法以外の著作としては『豊川本六諭衍儀大意』がある。これは後に琉球版『六諭衍儀』として刊行された。　3　**宇留真の国**　平安時代の大和において、「うるまのしま」は新羅（高麗）の鬱陵島をさしたが、江戸時代には、うるま＝琉球という認識が広まった。うるまを琉球とする最も早い例は、永正十年（一五一三）頃に連歌師宗碩が著した『藻塩草』とされる。江戸時代には、『狭衣下紐』第一の「琉球をうるまの島と云と也」の説が引かれることが多い。

琉球国の側でも、「うるま＝琉球」という認識を受け入れていた。識名盛命（一六五一～一七一五年）の『思出草』には、「かはらじなうるまやまとゝ隔つともこゝろの道と法のころもは」などの歌が載る（屋良健一郎「琉球人と和歌」）。　4　**北極の東南**　「北極」は、地球の中心を南北に通ると仮定した軸の北端。もしくは、天の北極にある星の名で、中国では天子の位に喩えられる。琉球が中国の東南に位置するということか。夏子陽『使琉球録』（詔書）には「琉球国僻処東南」とある。『中山伝信録』（巻第四「星野」）には、北極地を出る事二十六度二分三釐とある。　5　**陰陽の気正しく**　陰陽二気が正常な状態にあること。陰陽二気が調和することで、自然界の秩序が保たれ、それが政治・道徳などの人間のあらゆる営みに影響するという考え方に基づく。　6　**四のとき**　四季。　7　**天災地殃**　「殃」は災いのこと。天災地災に同じ。天地の災害。　8　**天朝より守礼の邦と称美し給ふ**　「天朝」に闕字あり。「天朝」は中国の朝廷、「守礼の邦」は国家の法制を守る国。『中山世鑑』巻第二（察度王）に、洪武二十五年に閩人三十六姓が移住し、琉球が明の礼楽を用いたので、明国大祖皇帝が琉球を「守礼之邦」と称したとある。首里城の守礼門（待賢門・首里門とも）には、一六六三年以降、「守礼之邦」の額が常に掛けられていた。夏子陽『使琉球録』（上「礼儀」）でも「琉球、我太祖所称守礼之邦也」とある。原田禹雄訳注『夏子陽使琉球録』によると、「守礼之邦」の語は『太祖実録』になく、万暦七年（一五七九）の尚永冊封の詔が初出。　9　**当今**　尚敬王（一七〇〇～一七五一年）に当る。在位は一七一三年から没年まで。　10　**万機**　皇帝のとりおこなう政治上の重要な事柄。天下の政治。　11　**稼穡**　農業。　12　**五倫の道**　儒教で重んじられる父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の五つの人間関係において守るべき道。父子では親、君臣では義、夫婦では別、長幼では序、朋友では信のこと。　13　**ひじりのみち**　聖人の道。　14　**人倫**　人が守るべき道。

15　**三公**　中国の官名。天子を補佐する三人の高官。清国では太師・太傅・大保を言うが、時代により異なる。日本では、太政大臣・左大臣・右大臣を指す。琉球では三司官を指すか。　16　**三五の長臣**　十五人の重臣。ここでは、琉球王府の評議機関の総称である表十五人（十五人衆）を指す。物奉行三人と次官の吟味役三人、申口方の長官三人と次官の吟味役二人、日帳主取二人、平等方の長官一人と次官一人の十五人（『大百科』）。　17　**三綱五常**　儒教の思想。三綱は人が重んずべき君臣・父子・夫婦の三つの道、五常は人が行なうべき五種の正しい道で、仁・義・礼・智・信を指す。　18　**産業**　職業　19　**鰥寡孤独の窮民**　『孟子』（梁恵王章句下）に基づく表現。鰥は老いて妻のないもの、寡は老いて夫のないもの、孤は幼くして父のないもの、独は老いて子のないもの。周の文王は、この四者を「天下之窮民」としてまっさきに救うことに務めた。　20　**五風十雨**　五日に一回風が吹き、十日に一回雨が降ること。天候がよく、世の中が太平な状態。　21　**干戈**　盾と矛。ここでは合戦のこと。　22　**仁義**　仁と義。道徳。　23　**ふるき文**　具体的に何を指すか不詳。　24　**大君**　国王のこと。尚敬王を指す。闕字あり。　25　**六の芸術**　六芸。中国で、士が学ぶべき六種の技芸。礼（礼儀）・楽（音楽）・射（弓射）・御（馬術）・書（書写）・数（計算）のこと。『周礼』（地官司徒　大司徒）による。　26　**寛保の初のとし、神無月の末**　東苑の諸芸披露が行われた年月は、寛保元年（一七四一）十月の末。ただし、本話と同じ諸芸披露を題材とした四話が書かれたのは、同年の「小春旬餘三日」（十月十三日）とされる。　27　**主上**　尚敬王を指す。闕字あり。　28　**叡感**　国王（尚敬王）が感心しほめること。闕字あり。　29　**厲す**　「勵」（＝励）の略字と見て「はげます」と読む。　30　**御諚**　国王（尚敬王）の命令。闕字あり。　31　**糸竹管弦**　音楽や楽器の総称。糸・弦は琴などの弦楽器、竹・管は笛などの管楽器を指す。　32　**松吹風も千秋楽を奏す**

るか　松に吹く風の音が「千秋楽」を演奏しているかのように聞こえる意。「千秋楽」は雅楽の曲名。雅楽などの終わりなどに演奏されたため、ここでは「諸芸づくし」の終わりを意味する。松に吹く風の音が意味ありげに聞こえる表現としては、「松吹風モ自ラ万歳ヲ呼ブカト被奇」（『太平記』巻第十一「諸将被進早馬於船上事」）の例がある。33

済〻　威儀の盛んな様。

（小此木敏明）

四

〈本文〉

同時[1]

山内親方[2]

東南に雲おさまり、西北に風静にして、国富民豊に君徳四海に普く、万民鴻恩に沐して、百司千億の諸人、御代をあがめて各時をたのしみ、四民ともに書を学び、六芸に渡りて仕へ奉らんことを〔（二字欠カ）〕[4]ともながら、指を折るにも暇なし。かゝるめでたき御代にしあれば、数の芸能御勧[5]のために、堪能の人々東[6]の御園にめされ、各芸術を　照覧[7]あそばし給ひける中にも、豊芦原の池[8]の坊[9]より伝したて花、抛入[10]の数々、こゝろの花の匂ひを移して、いとめづらかなり。或、利休[11]居士の流を汲し茶の湯の礼式、正しくして尤[12]うごそかなり。或、武芸手錬の法、勇々しく聞え、或、囲碁[13]、象棋[14]、勝劣のくらべ、糸竹[15]音楽の妙曲、其外さま〴〵の芸能、叡覧[16]ましまして、終日の御佳興、類も稀にぞ聞えける。彼唐土の聖の御代のいにしへ、霊台[17]におゐて、民をいつくしみ給ふ賢しこき御政の例もいまさらおもひいでられ、偏に是れ、わが　大[18]君の御恵深く、流の末まで浅（あさから）ずして、いさみに勇んでよろこびあへるその風情、筆にも言葉も及れず。おろかなる下官も時のめい[19]ぼく、身に余りて、ありがたくもいとたうとし、

于時寛保初の年小春旬餘三日

〈口語訳〉

前の文章の内容と同じ時の出来事である。

山内親方

東南の雲は穏やかで、西北の風は静かで、国は富み、民も豊か、君主の徳は国内に行き渡り、全ての人々が大きな恵みを受けて、多くの役人は（尚敬王の）御代をあがめ、それぞれが今を楽しみ、四民はともに書を学び、六芸にわたって（尚敬王に）仕え申し上げることを（二字脱カ）人々は、指を折っても終わりがない（くらいたくさんいる）。このような尊い御代において、数々の芸能を奨励なさるために、達者な人々を東苑（御茶屋御殿）にお招きになり、それぞれの芸をご覧あそばされなさった。その中でも、日本の池坊より伝わった立花や抛入花の数々には、美しい心の様子が宿っていて、とてもすばらしい。また、千利休の流れを汲んだ茶の湯の作法が正確で大変厳かである。さらに、武芸の練習の方法も勇ましく思え、加えて、囲碁や象棋の勝劣の競争、管弦の演奏の名曲、その他、様々な芸能を、（尚敬王が）ご覧になられて、終日にわたる風流な楽しみは、類稀なるものだと評判であった。かの中国の聖人の御代の昔、霊台で民をいつくしみなさったすぐれた政治の例も今改めて思い出されて、ひとえにこれは、わが大君（尚敬王）のお恵みが深く、その流れの末まで浅くなくて、（人々が）勇みに勇んで喜び合うその風情は、筆でも言葉でも表現できず、愚かな私のような者も、（尚敬王の治世を生きる）今の面目は、身に余るもので、ありがたくとても尊いものである。

時に寛保の初めの年の十月十三日

〈注釈〉

1　**同時**　この前に収録されている「於御茶屋諸芸つくしの時」と同じ時の出来事を記した文章であることを示している。なお、これらの文章が記されたのは寛保元年（一七四一）である。　2　**山内親方**　山内盛方か。乾隆五年（一七四〇）に山田グスクに建てられた「護佐丸祖先墓碑」に「書調人　毛氏　山内親方　盛方」とあり、この文章が書かれたのと同じ時期の人物である。　3　**東南に雲おさまり～四海に普く**　謡曲「呉服（からは）」に「神功皇后の三韓を従へ給ひしより、和国異朝の道広く、人の国まで靡く世の我が日の本はのどかなる御代の光はあまねくて、国富民ゆたかなり。東南雲収まりて、西北に風静かなり」と類似した表現がみられる。　4　**御代**　この文章が書かれた寛保元年（一七四一）は尚敬の治世（一七一三～一七五一年）にあたる。　5　**勧**　「歓」と書いて「勧」と傍記してある。意味の上でも「勧」が適切であろう。　6　**東の御園**　御茶屋御殿（東苑とも称す）のこと。三話の注1参照。　7　**照覧**　貴人（ここでは琉球国王）がご覧になること。闕字あり。　8　**豊芦原**　日本国の美称。　9　**池の坊より伝したて花**　琉球に池坊流の華道が伝わっていたことは、池坊専好の代の「永代門弟帳」に元禄九年（一六九六）の入門者として「流球那覇之内　禅海」が見えることからも窺える（守屋毅「資料紹介　池坊永代門弟帳―その一」）。禅海は那覇の寺院の僧か。また、康熙五十二年（一七一三）には、池坊の門弟である毛利作右衛門正周（薩摩藩士）から立花を学んだ南風原親雲上守周に対し、器量の人に立花を伝授するよう王府から命が出ている（『那覇市史資料篇　第一巻七』一七頁）。琉球における華道の受容については渡名喜明「沖縄文化史の一断面」（『山本弘文博士還暦記念論集　琉球の歴史と文化』所収）に詳しい。なお、石垣島には、薩摩藩士の丸田孝兵衛正苗から明和八年（一七七一）に儀間親雲上に相伝された「生華聞書口伝集」をはじめ、いくつかの華道関係の書物が伝来している（『石垣市史　八重山史料集1』）。　10　**抛入**　「なげいれ」と読む。定型化した立花に対して、風情を重んじ、自由に生けたもの。　11　**利休居士～礼式**　島津氏の侵攻以前より琉球にも茶の湯が伝わっていたようだが、近世になると茶の湯の受容が本格的に進む。薩摩から琉球に赴任した在番奉行との交流、薩摩への上国の際の薩摩藩士との交流などの必要性から士族たちの教養として必要とされた。向象賢（羽地朝秀）の「羽地仕置」にも、士族が身につけるべきものとして「謡」「唐楽」「立花」などと共に「茶道」が見える。薩摩に上国した際に参加した茶会を識名盛命は「利休一道の風骨みゆ」と記しており（池宮正治「毛起竜（識名盛命）『思出草』翻刻と注釈」）、また、島津義弘が茶の湯の作法を千利休に問い、利休が答えた「惟新様より利休江御尋之条書」の写本が琉球に伝来していたことも知られる（岡本弘道「近世琉球における茶文化の重層性」）。琉球士族が利休の流れを汲む茶の湯に触れる機会は多かったようだ。　12　**うごそか**　おごそか（厳か）。　13　**囲碁**　琉球人が囲碁を打ったことを示す事例としては、宝永七年（一七一〇）の屋良里之子と本因坊道知、寛延元年（一七四八）の田頭親雲上と井上因碩との対戦が知られている。いずれも、江戸立（江戸上り）の際の出来事である。また、種子島家の家臣が記した「新古見聞記」（種子島時邦氏蔵、種子島開発総合センター寄託）には、鹿児島琉球館に詰めている役人が、種子島家の家臣の家を訪れ、囲碁を打ったことが記されている。　14　**象棋**　琉球では中国式の将棋である象棋（チュンジー）が行われていたようである。一七六二年に土佐国に漂着した琉球船乗組員の話を記録した『大島筆記』には「象棋ハ日本トハ違ヱリ」と記されている。象棋は盤の線上に駒を置き、取った敵の駒を使うことができない、といった点が日本の将棋とは異なる（『大百科』「象棋」八木明徳）。戦前までは象棋の愛好者は多かったが、戦時下には衰退、戦後には日本将棋の愛好

者が増えた（『大百科』「将棋」星雅彦）。　15　**糸竹**　琴、琵琶などの弦楽器と笙、笛などの管楽器の総称。また、それらを演奏すること。16　**叡覧**　ここでは国王である尚敬がご覧になること。闕字を用いている。　17　**霊台**　周の文王が天文観測のために建てた物見台。　18　**大君**　国王を指し、闕字を用いている。三の「於御茶屋諸芸づくしの時」でも国王を「大君」と表現している。　19　**めいぼく**　面目。

（屋良健一郎）

五

〈本文〉

御茶屋の景

千早振神の誓もありそ海の浜の真砂は尽るとも、君が祝ひはよも尽ず。されば我が国偏少なりといへども、神代のいにしへより中華若木に使簡を捧、方物を献じ、唇歯のおもひをなし給ふゆへ、帝、勅使を遣はし宝位を授給ひ、めでたかりける御事末世の今に至るまで松の葉の散りうせず、正木のかづらながく伝はり、去ぬる己亥（つちのとい）のとし　勅使来り給ひ、古き御儀式故なく備り、御践佐ましく、猶も万機の政（まつりごと）穏にして、唐虞三代の徳を称し、聖経賢伝の道を慕ひ給へば、国土豊に民栄え、老若男女貴賤都鄙、喜悦の眉をひらき、巷に唄ふ言の葉も「石なごの石の大瀬なるまでもおかげふさひめしよわれわが王がなし」となり。誠なるかな、君、臣を見る事手足のごとく成時は、臣、君を見ること腹心のごとくすと云り。爰に王城の東南に園あり。時しも草木零落し、梅桜二木の樹、諸花に先がけし、常磐木の影よりほの見えし粧ひ、遠近の四方のけしき、冬枯のいとゞさびしきありさまは、筆にも及がたく、還て春にも勝れければ、御身近く召遣はる輩を召れ、御幸なり奉れば、実に目の前の佳興に乗じ、詩歌・管絃に狂言・歌読とり〴〵多き其中に、或は竹松松間に円居して文王のむかしをおもふもあり。或は、洞口芝の上に碁を囲て日の暮るをもしらざるもあり。いづれ御遊びのはしと成。還御時移ることこそありがたき。

于時享保六年丑朧月日

〈口語訳〉

御茶屋の影色

千早振る神の誓いがあるという荒磯海の浜の真砂が尽きたとしても、国王への言祝ぎは万が一にも尽きることはないだろう。それ故に、我が琉球は小さい国ではあるが、（国王は）神代の昔から中国と日本に使者を送って書簡を捧げて、土産を献上して友好の気持ちをあらわされたので、中国の皇帝は冊封使を派遣して王位をお与えなさるという慶賀すべきことは、末代の今の世に至るまで長く伝わっている。過ぎ去った己亥の歳（一七一九年）に冊封使がいらっしゃり、古式に則った御儀式の準備も滞りなく備わって、王位に就かれなさると、やはりあらゆる政（まつりごと）は穏やかに行われ、聖天子がいた古代中国の為政者の徳を称え、聖人や賢人が書き伝えた政道を（国王が）見習いなさると、国土は豊に民は栄え、老若男女貴賤都鄙、すべての人々は喜びを顔にあらわして、巷間で歌われる歌は「小石が大石になるまでいつまでも、国王が支配者として相応しくあり続けてください」というものである。君主が自分の手足のように大切に思っていたならば、臣下も自分の腹や胸のように大切に思うようであるというのは、実のことであるよ。さて、首里城の東南に別邸（東苑）がある。今は草木は葉を落としているが、梅桜の二木は、他の諸木に先駆けて花を咲かせており、常緑樹の葉陰からわずかに花が見えた姿や、遠近の四方の景色、冬枯れのひどくひっそりとしている様子は、文にも書けないほどで、かえって春の景色よりも勝っているので、尚敬王は側近の者をお召しになって、

東苑に行幸なされると、実に眼前のすばらしい景色に興がのって、漢詩や唐楽に狂言・和歌（あるいは歌三線に組踊等）をあれこれ多くなさる合間に、竹松の林の中で円座して文王の昔を偲ぶこともあった。また、洞穴のある芝の上で碁を囲んで日が暮れるのも忘れることもあった。どれも御遊行のひとつである。御城に帰る時が来るのが、もったいないことであるよ。

享保六年丑（一七二一）十二月

〈注釈〉

1　**御茶屋**　東苑のこと。俗に御茶屋御殿といわれた。詳しくは、三話「於御茶屋諸芸つくしの時」の注1参照。「琉球雅文集」（琉球大学附属図書館）にも「崎山之御園一件」があって、御茶屋御殿が描かれている。　2　**千早振る**　「神」や神を含む語（「神世」「神無月」など）、神に縁の深い物をあらわす語（「天の岩戸」「玉の簾」など）等にかかる枕詞。　3　**ありそ海**　荒磯海。岩が露出し荒波の打ち寄せる海辺。「ありそみ」。「あり」に掛けて用いられることが多い。『古今和歌集』八一八に「有そ海の浜のまさごとたのめしは忘るる事のかずにぞ有りける」がある。　4　**中華若木**　中国と日本。若木は日本の別名、扶桑と混同したことからいう。　5　**使簡**　使者の携えた書簡。　6　**方物**　「方物」は土地の産物、土産の意だが、ここでは琉球が中国に献上した貢ぎ物を意味する。　7　**唇歯**　互いに利害関係が緊密であること。唇歯輔車。「万国津梁の鐘銘」に「以大明為輔車以日域為唇歯在此二中間湧出之蓬莱嶋也」（『金石文』）とある。「中華若木」と「唇歯」は「万国津梁の鐘銘」を意識しているか。　8　**帝、勅使を遣はし宝位を授給ひ**　「帝」とは中国皇帝の事。「帝」は闕字になっている。中国皇帝が琉球に冊封使を送って王の位を授ける意。ここでは、一三七二年、建国間もない明皇帝の招諭を受けて中山王察度が泰期を送って進貢が始まった中国との冊封関係をさしている。中国皇帝からの冊封使は、永楽二年（一四〇四）に時中を使わしたことに始まる。この時、中山王武寧と山南王汪応祖が冊封された。なお、「授給ひ」は本文は「授給ふ」とあり、見せ消ちされて、「授給ひ」と訂正されている。　9　**松の葉の散りうせず、正木のかづらながく伝はり**　末永く変わらないことをあらわす。『古今和歌集』序文に、歌の文字が「あをやぎのいとたえずまつのはのちりうせずしてまさきのかづらながくつたはり」とでる。　10　**去ぬる己亥のとし　勅使来り給ひ**　一七一九年、正使海宝、副使徐葆光が尚敬王の冊封使として派遣されたことをいう。本文は「享保六年丑」（一七二一）に書かれていることから、海宝・徐葆光が渡琉して間もない時期に書かれたことになる。『中山伝信録』の第四「紀遊」に「東苑」があり、冊封使等はここを訪れていることが分かる。徐葆光は「望仙閣」に額がなくなっているので、額を書くことにしたと記している（原田禹雄訳注『中山伝信録』）。　11　**御践佐**　「御践祚」の誤りか。「祚」と「佐」は、つくりが似ている。「践祚」は天子が位に就くこと。ここでは、冊封使が尚敬を国王として任命することを意味する。　12　**唐虞三代の徳**　「唐虞三代」は堯・舜に夏・殷・周の三代を加えて呼ぶ称。中国の伝説上の聖天子、堯・舜がいた古い時代をいうか。堯・舜のような聖天子がいた古い時代の徳。　13　**聖経賢伝の道**　「聖経賢伝」は聖人の述作した書と、賢人が書き伝えた書の意。聖人や賢人が書き伝えた施政の大綱、政道のこと。　14　**喜悦の眉をひらき**　非常に喜ぶ意。　15　**石なごの石の〜わが王がなし**　国王の長寿を言祝ぐ琉歌。小石が大石になるまでいつまでも、国王が支配者として相応しくあり続けてくださいという意。この琉歌は十を数える琉歌集においても、例外なく「かじゃでぃ風節」で歌われている（『琉歌大成』）。本文中に「巷に唄ふ言の葉」とあるが、国王を称える特別な祝儀の場で「かじゃでぃ風節」にのせて歌われる極めて特殊

なウタである。「おかげふさひめしよわれ」は、オモロでは「かけてふさよわれ」（第四―一六八等）とある表現である。やはり、国王に対して使われることが多いが、琉歌には〈かけふさる〉の用例はなく、敬語のかたちになっている〈おかげふさひめしよわる〉だけである。これからも、琉歌の用例は国王に対して用いられた限定された用例になっていることが分かる。　16　**君、臣を見る事～腹心のごとくす**　『孟子』（離婁章句下）が出典。君臣の関係が緊密であり一体であることをいう。　17　**爰に王城の東南に園あり**　本文は、ここから前後に分かれる。前半部は、主に冊封された尚敬王賛美、後半部から表題である「御茶屋の景」になる。「東南に園あり」とは、御茶屋御殿のこと。　18　**梅桜二木の樹、諸花に先がけし**　梅と桜が他に先駆けて花を咲かせる意。梅と桜の花が同時期に咲くものとして捉えているのは興味深いが、それが以下で冬の景色として捉えられていることも独特である。本文が書かれたのは、「朧月」（十二月）とあることから、冬に書かれたことが前提になっている。　19　**御身**　一七一三年から一七五一年まで在位した尚敬王のこと。　20　**詩歌・管絃に狂言・歌読**　漢詩を読み唐楽を奏で、大和の狂言をして和歌を詠むことをいっていると理解されるが、同時に三線等の琉楽を奏し、組踊を上演し琉歌を歌うことも含まれているか。狂言には、滑稽な内容の琉狂言も考えられる（池宮正治「組踊に関する資料三件」『琉球芸能総論』）。　21　**竹松松間**　不明。「竹松間」か、「松」は衍字か。　22　**文王**　周王朝を創建した王。中国古代の理想的な君主とされる。　23　**洞口**　洞穴のこと。東苑に洞穴があると思われるのは、程順則の「東苑八景」（其五）に「仙桃花發洞門開」（仙桃の花發き、洞門開く）、「猛獣群成安在」（猛獣群れを成して安くにか在らんや）と詠まれており、洞穴の口には獅子の像（シーサー）が置かれていることを詠んでいる。　24　**碁を囲て日の暮るをもしらざるもあり**　「琉球雅文集」の「崎山之御園一件」にも似た表現として、「隠々として仙家と思ふ。爰にて書を観じ碁を囲ば、自から日を忘れ浮世をわするべし」がある。

（島村幸一）

六

〈本文〉

盆山記[1]

惣慶[2]

浦[3]はあかし、山[4]はさらしな、さらぬ野沢の面かげまで此石のいさゝかなる内にこめて見るぞおかしけれ[5]。舟車を駕せずしてかく居ながら数程（かぞえるほど）[6]の勝景[7]を目のまへにもてあそぶこと、ひとへに仙家[8]の妙術[9]ともいひつべし[10]。そのたのしみたれかうばふべくもあらで、常に得失なし。哀、三公[11]にもか[12]へずこの盆山。

〈口語訳〉

盆山記

惣慶

浦は明石、山は更級が名高いが、なんでもない野辺の沢の様子までこの盆石のわずかな空間に詰め込まれて見るのは趣がある。舟や車には乗らずしてこのように居ながら列挙するようなすばらしい景色を目の前に置いて眺めていることは、もっぱら仙人の巧妙な術とも言えるだろう。その楽しみは誰も奪うことはできないので、常に当たりはずれがない。ああ、三公の位にもかえがたい、この盆山である。

〈注釈〉

1　**盆山**　庭に石を積み上げて造った人工の山。盆の上に石、砂で山

の形を作ったもの。箱庭。盆景。「石垣家文書」に、庭園について和文と漢詩で書かれた「巣雲園記」がある（『石垣市　八重山史料集1』）。

2　**惣慶**　惣慶忠義のことか。歌人。唐名は伊世高。康熙二十五年（一六八六）生、乾隆一四年（一七四九）卒。康熙五十四年（一七一五）、三十歳で系図座筆者になり、黄冠に叙せられたが、雍正七年（一七二九）に、「不届により一門中告訟、八重山島に流刑」となる。不行跡を親類から訴えられて二度、八重山と宮古に流罪になり、最後は宮古で亡くなる。享年六十四。その間に父親のあとを継いで金武間切惣慶の地頭になったので通称を惣慶親雲上という。和歌和文、琉歌に優れ、その若干が『浮縄雅文集』や琉歌集に伝えられている。沖縄三十六歌仙のひとりで、『沖縄集』に「寄露無常」（露に寄せる無常）と題して「はかなくも同じつゆなる身をもちて　草葉の上をよそに見るかな」が採られている（池宮正治『近世沖縄の肖像　下』）。　3　**浦はあかし**　浦は明石。明石は播磨国の歌枕。現在の兵庫県明石市付近。「明石潟」「明石の浦」「明石の沖」「明石の浜」など種々な形で詠まれ、景勝地として名高い。明石に「（夜を）明かし」を掛け、「月」などともに詠まれることが多い。「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」（『古今集』四〇九、よみ人しらず）などがある（『歌ことば歌枕大辞典』）。　4　**山はさらしな**　山は更級。更級は信濃国の歌枕。現在の長野県更級郡のあたりで、姨捨山の一帯。「わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て」（『古今集』八七八、よみ人しらず）をはじめ、姨捨山と一緒に詠まれる例が多い。「月影はあかず見るともさらしなの山のふもとにながゐすな君」（『拾遺集』三一九、紀貫之）のように、姨捨山を「更級の山」と詠む作例も多く、月の名所として詠まれるのが一般的である（『歌ことば歌枕大辞典』）。　5　**おかしけれ**　をかしけれ。形容詞「をかし」はおもしろい、趣がある、風情があるの意。　6　**駕せず**　乗り物に乗らない。　7　**勝景**　風景がすぐれていること。絶景、景勝。　8　**もてあそぶ**　身近に置いたり眺めたりして観賞の対象とする。　9　**仙家**　仙人のすみか。また、仙人。仙人になる方法を説く人。道家。　10　**妙術**　すぐれた術。霊妙な術。巧妙な術。　11　**三公**　中国の官名。最高の地位にあって天子を補佐する三人。時代によって内容が変遷するが、周は太師・太傅・太保、秦、前漢は丞相・御史大夫・太尉、時に大司徒・大司馬・大司空とも称し、後漢から唐までは多く太尉・司徒・司空を三公と呼び、宋、元、明、清は周制にもどって太師・太傅・太保をいうが、後世になるほど空名化した。　12　**かへず**　かえられない、の意か。

（綱川恵美）

七

〈本文〉

豊川親方[1]

水無月の末つかた、おほやけのいとまを得て、友人列（つれ）だち、路中[2]路外に遊て、四方山の景色[3]を詠め、あつさを凌ぎける。友どち申侍り、「今の佳興[4]の楽き事をふみに書侍らん」と、再三望（のぞむ）にしたがひ、狂言をかへり見ずして、管見の及（およぶ）処を書つゞりて、改削をねがひ侍る。

名勝佳地に遊（あそび）て風景を詠め、山水月花を見て楽む事[5]は、世の人好む所にして、いにしへも今も替ふる事なし。先（まず）そのあらましを述るに、あめつち陰陽の道のおこなはりて、二六月[6]、数のかわる〳〵ゆきめぐるにしたがへ、万物の景気[7]のうるはしき、雲霞のたなびき、風のそよぎ、雨露のうるほひ、山のもやう川の流れ、芳草嘉木の花さき実のり、鳥獣虫魚のしわざ、折にふれ、時にあひて、是をもてあそべば、かぎりなき楽みあり。又声を聞、色を見、〔もの〕喰ひ、香をかぎ、動き、静[8]

なる業よき程に好めば、ことぐ〳〵く楽しからざる事なし。是みな、耳目口鼻体の五官、[9]外物に触発して其心を開き、その情を清くし、[10]鄙意を洗ひすゝぎて、よろこばしき力を以て善心を起し、徳をすゝめ、智をひろむるの助とする事、君子の好む所にして、凡俗の楽（たのしみ）と同じからざる所也。[11]漢の東平王の、「日々に善をするをいとたのしむ」との給ふも、これらの楽みまします故にや。[12]又古の君子、詠歌舞蹈して心をたのしまし め、血脈をとゝのへ、気をやしなふたのしみあり。[13]又一師五友の楽みあり。[14]又他郷に旅行して古今の書を読み、[15]良友ありて道を論じ、異見を聞く楽みあり。又他郷に旅行して、[16]見馴ぬ山川の有さま、産物のことなるを見て、心を慰むたのしみあり。この外、其人の好む所によりて、たのしき事のたぐひ、あまたあるべけれ。[17]されども山水風月の佳景は、本より定りたるあるじなければ、禁しする人もなく、人に乞求（こいもとむ）るにも及（およば）ず、財（たから）らを出して買（かう）にもあらざれば、一銭の費もなく、貧しき人も得やすく、心気を養ふよすがにして、見れども尽ず。[18]そのたのしみ淡ければ、ひねもすたのしめども身にわざはひなく、人の諫（いさむ）るにもあらずして、[19]大和（だいわ）の楽みを失されば、あしきを懲して心を快くして、善をたもつ。[20]この故に、この楽みを存養して常に心の内にあれば、徳の身をうるほして、心ひろく体ゆたかなる事、あたかも富（とめ）る人の家をうるほす如くなりぬ。されば、この時楽しまずして、いづれの時をや期せん。

寛保二歳季夏日[21]

〈口語訳〉

豊川親方

六月の終わり頃、王府から休みをもらい、友人を連れ立って市中や郊外を遊興し、様々な景色を眺め、暑さをしのいでいた。仲間が申しますに、「今の興趣の楽しいことを文章に書きましょう」と、再三求めるに応じ、ざれごととなることを顧みずに、管見の及ぶところを書き綴ったので、改削をお願いします。

景色のよい美しい地をめぐって風景を眺め、山水や月花を見て楽しむことは、世間の人が好むところであり、昔も今も変わることがない。まず、その概略を述べると、天地が和合して、十二の月の数が代わる代わるめぐって行くにつれて、万物の眺望は美しく、雲霞のたなびくさま、風のそよぎ、雨露による潤い、山の風情や川の流れ、香草や良木の花が咲き実るさま、鳥獣や虫魚のふるまいが、折々の時節に遇い、そのことに興じれば、この上ない楽しみがある。また、声を聞き、色を見、ものを食べ、香り嗅ぎ、動き、平穏な行いを適度に好めば、すべて楽しくないことはない。これは皆、耳・目・口・鼻・体（皮膚）の五つの器官が、外界に触発されてその心を開き、その感情を清らかにし、愚考を洗い流して、よろこばしい力によって善の心を呼び起こし、徳を勧め、知恵を広める助けとすることは、君子の好むところで、平凡な楽しみと異なる点である。漢の東平王（劉蒼）が、「日々に善を行うことをとても楽しむ」とおっしゃったのも、これらの楽しみがおありになったためではないか。また昔の君子には、歌を詠み、拝礼して心をたのしませ、血脈をととのえ、気を保つという楽しみがある。また、聖賢の書を師とし、筆・硯・紙・墨・草案を友とする楽しみがある。また、古今の書を読み、良友と道について論じ、意見を聞く楽しみがある。また他の土地に旅行して、見なれない山川の様子や産物が異なるのを見て、心を晴らす楽しみがある。この他、その人の好みによって、楽しいことの類は多くあるだろう。しかし、山水や風月のめでたい気には、初めから決まった持ち主がいないので、禁止する人もなく、人に乞い求めることもできず、財産を出して買うものでもないので、一銭の出費もなく、貧しい人も得やすく、心と気を保つ縁として、見ても尽きることがない。その楽しみ方があっさりしていれば、

終日楽しんでも自身に災いはなく、人が諫めるものでもなく、調和の楽しみが失われれば、よくない点を戒め、心を快くして善を保つ。そのために、この楽しみをめぐみ養って常に心の内に置いておけば、徳が身体に満ちて、心が広く体が豊かになることは、あたかも裕福な人が家を富ますようである。そうであれば、この時を楽しまずして、いつを楽しむというのか。

寛保二年（一七四二）六月の日

〈注釈〉

1　**豊川親方**　豊川正英か。豊川正英は三話の注2参照。　2　**路中路外**　原文のまま。「洛中洛外」の誤りか。　3　**色**　「気」に見せ消ちし右に「色」と傍記。　4　**佳興**　風流なたのしみ。興趣。　5　**楽む**　以下、さまざまな楽しみについて述べられているが、貝原益軒の『楽訓』三巻によるところが多い。『楽訓』は、宝永八年（一七一一）に出版されている。本文は寛保二年（一七四二）の成立なので、豊川正英が読んでいたのは版本か。　6　**あめつち陰陽の道**　天地が和合すること。　7　**二六月数の～かぎりなき楽みあり**　『楽訓』巻上「惣論」の以下の記述による。「四時のめくりゆく序にしたかへる折々の景気のうるはしきありさま、雲烟のたなひける朝夕の変態山のたゝすまひ川のなかれ風のそよき雨露のうるほひ雪のきよき花のよそほひ芳草のさかへ嘉木のしけれる鳥獣虫魚のしわさまてすへて萬物の生意のやまさる是をもてあそへはきハまりなき楽なり」。「芳草嘉木」は、よいかおりのある草と立派な木。　8　**又声を聞～耳目口鼻体の五官**　『楽訓』巻上「惣論」の以下の記述による。「又わが耳目口鼻形の五官外物にましはりて色を見こえを聞き物くひ香をかきうこきしつかなる五のわさ欲すくなくよきほとに過すされハあふさきるさこと〳〵に楽しからさる事なし」。「喰ひ」の上に二字分の空白があるが、『楽訓』を参照すると「もの」が入るか。　9　**外物に触発して其心を開き、その情を清くし**　『楽訓』巻上「惣論」の以下の記述による。「是に対すれは其心を開き其情を清くし道心を感し興し鄙吝をあらひ尽すへし是を天機に触発すと云触発とハ外物にふれて善心をおこすをいへり」。「外物」は外界。　10　**鄙意を洗ひすゝぎて～智をひろむるの助とする事**　『楽訓』巻上「惣論」の以下の記述による。「鄙吝をあらひすゝく助となれり是も亦わか徳をすゝめ知をひろむるよすかなるへし」。「鄙意」は自分の意見をへりくだっていう語。愚考。『楽訓』では「鄙吝」（いやしくけちなこと）とある部分を、「鄙意」としている。　11　**漢の東平王の、「日々に善をするをいとたのしむ」**　後漢の顕宗孝明帝が東平王（劉蒼）に、「家にいる時、何が最も楽しいか」と尋ねたところ、「為善最楽」（善を為すこと最も楽し）と答えたことを言う。出典は『後漢書』（光武十王列伝第三十二）の「東平憲王蒼伝」。『楽訓』巻下「後論」にも、「人の楽ハ善を行ふよりたのしきハなし漢の東平王の善をするハいと楽しといへるむへなるかな」とある。　12　**又古の君子～気をやしなふたのしみあり**　『楽訓』巻上「惣論」の、「古人は詠哥舞蹈して其血脉をやしなへり是心を楽しましめ氣をやしなふ術なるべし」による。「舞蹈」は拝礼。　13　**又一師五友の楽みあり**　『楽訓』巻下「読書」に、「或人のいへるハ聖賢の書を以一の師とし筆硯紙墨と案とを以五の友としあけくれ是にましはるは益ありて楽多し」とあるのに基づく表現。　14　**他郷に旅行して**　目移りによる衍入を縦線で削除している部分。　15　**良友ありて道を論じ**　『楽訓』巻上「惣論」に「又良友ありて道を論し同じく月花を賞して楽しミ」という同様の表現あり。　16　**見馴ぬ山川の有さま、産物のことなるを見て**　『楽訓』巻上「惣論」に「又いひしらぬ異境にゆきて見なれぬ山川のありさまを見て」という同様の表現あり。　17　**されども山水風月の佳景は～見れども尽ず**　『楽訓』巻上「惣論」の以下の記述による。「これをたのしめる人すなハち

山水月花の主(アルシ)となりて人にこひ求むるに及はすたからもてかふにあらされは一銭をついやさす心にまかせてほしゐまゝにとりて用れともつきすつねにわか物としてれうすれとも人いさはすいかんとなれは山水風月の佳気ハもとより定れる主なけれは也」。 18 **そのたのしみ淡ければ〜人の諌るにもあらずして** 『楽訓』巻上「物論」の、「其楽淡(アハ)けれはひねもす楽しめとも身にわさはひなく人のとかめ神のいさむるわさにあらす」による。 19 **大和** 「だいわ」と読む。すぐれた調和。 20 **この故に〜あたかも富る人の家をうるほす如くなりぬ。** 『楽訓』巻上「惣論」の、「此楽内にあれハ徳の身をうるほして心ひろく體ゆたかなる事あたかも富の家をうるほすか如くなるへし」による。「ゆたか」の「た」は「る」を見せ消ちで訂正。「存養」はめぐみやしなうこと。 21 **季夏** 陰暦六月の異称。

（小此木敏明）

八

〈本文〉

[1]添石親雲上

[2]よつの海、なみ静にして、かぜおだやかに、あめ塊(つちくれ)をうごかさず。[3]戸ざゝぬ御代に相生(あいおい)[4]の民、君徳に化し、鴻恩蒼生[5]におよんで、四業[6]おの〳〵時を得てこゝろようし侍るゆへ、[7]修学堪能[8]の士きそひ起て、その[9]みちをつとむ。[10]射術は六芸の其一(そのひとつ)にして、[11]君子の翫(もてあそ)ぶゆへ、弓(いる)射[12]ときにやかならず争と文宣王[13]の丶給ふ。仁[14]人は弓いるものにも孟夫子はたとひ給ふ。されば中正[15]の節を本とし、勝劣を見て、わがたしなむ処のほどを知りて、道に鍛錬、工夫の便りともなる。大概、美人草[16]をもてはやすといへども、日置、玉金、小笠原[17]、伊曽、山本なんどの流義を汲て、師の奥義を究めてこゝろざしを由基[18]げいが手段にもおとらじとし、国土あん穏の為、妖(わざわい)[19]を払て、神慮[20]をすゞしむるゆへ、盛伝[21]の雅丈、此度　詔命を蒙り、中華へ赴き給ふの餞とて、友人をつどひて、射術を興行し、錦着[22]帰郷の願意を祈り侍るものなら[23]し。

月日

〈口語訳〉

添石親雲上

四海（琉球国内）は波も静か、風も穏やかで、雨が土をいためることがないのと同じように平和に治っている。平穏な（尚敬王の）治世に、共に生きる民は（尚敬王の）徳に感化され、王の大きな恵は人々に及び、四民は好機に恵まれてそれぞれの生業に善良なので、学びを修め、その道に長けた士族は、競って、自らの道に励んでいる。射術は六芸の一つで、君子が興じるものなので、弓を射る時は必ず争いが生じると文宣王（孔子）は仰った。仁の徳を備えた人というのは弓を射る人なのだと孟子はたとえなさった。そうであるから、偏らない中庸の行いを基本とし、勝劣を見て自分のたしなみの状況を知ることで、道に鍛錬し、工夫するための便りともなるのである。大概、美人草を大切にするとは言え、日置・玉金・小笠原・伊曽・山本などの流儀を汲み、師の奥義を究めて、志を（弓の名人として知られた）養由基や羿にも劣るまいとし、国土の安穏のため、祟りを払って神の御心を鎮める（のが射術な）ので、伊舎堂盛伝が今回、（尚敬王）のご命令を受け、中国（清）へ赴きなさることへの餞として、友人を集めて射術を行い、（盛伝が）故郷に錦を飾るようにという願いを祈るものであります。

月日

〈注釈〉

1　**添石親雲上**　豊川親方正英か。三話の注2参照。　2　**よつの海～あめ塊をうごかさず**　「よつの海」（四海）は、国内の意。「あめ塊をうごかさず」は、世の中がよく治まっていることのたとえ。降る雨が静かで、土をいためないことによる。『宴曲集』（鎌倉期の成立）に「四海波閑かにして、九州風治まり雨つちくれを犯さず」とある（照屋論文）。この添石親雲上（豊川正英）の文では、国が穏やかに治まり六芸が盛んになっている様子が記されるが、このような記述は同人による三の「於御茶屋諸芸づくしの時」および四の山内親方の「同時」にも見られる。　3　**戸ざゝぬ御代**　とざさぬみよ。戸締まりをしなくても安心していられる御代。平穏でよく治まった御代。この文は一七二三年に書かれたものと考えられることから、ここでは尚敬の治世（在位一七一三～一七五一年）を指す。　4　**相生**　あいおい。二つ以上のものが並んで生育すること。歌舞伎の『階子乗出初晴業』（一八九二年）に「四つの海原浪立たず、静けき御代に相生の、松に由縁の下り藤」とある。　5　**鴻恩蒼生におよんで**　「鴻恩」は大きなめぐみ。「蒼生」は一般の人々。琉球国王（尚敬）の恵みが国内の人々に及んでいることを記す。山内親方「同時」に「君徳四海に普く、万民鴻恩に沐して」と類似した表現が見える。　6　**四業**　四民（あらゆる階層の人々）のそれぞれの業を指すか。『漢書』に「士農工商、四民に業あり」とある。三「於御茶屋諸芸づくしの時」に「四民おの〳〵産業をたのしみ」、四「同時」には「各時をたのしみ、四民ともに書を学び」と類似した表現が見える。　7　**時を得てこゝろようし**　「時を得る」は、好機をつかんで、運命にめぐまれての意。「こゝろようし」は「心よくし」のことで、善良であるの意。　8　**侍るゆへ**　侍る故。故の旧仮名遣いは正しくは「ゆゑ」。以下同じくこの和文では「ゆゑ」となるべきところが「ゆへ」と記されている。　9　**修学堪能の士きそひ起て**　三「於御茶屋諸芸づくしの時」にも「修学堪能の士、競ひ起て」とあって六芸が盛んに行われている様子が記されている。　10　**射術**　弓を射る術。弓術。王府役人が薩摩へ上国した際に騎射を見学したことが家譜に見え（「向氏家譜（具志川家）」『那覇市史　資料篇第一巻七』二八三頁）、琉球人は薩摩藩士との交流の場で射術に触れる機会が少なくなかったと考えられる。　11　**君子の翫ぶゆへ～文宣王のゝ給ふ**　文宣王は孔子の諡。開元二十七年（七三九）、唐の玄宗がおくった。『論語』八佾の「子曰、君子無所争。必也射乎。揖譲而升下、而飲。其争也君子。」（子曰く、君子は争う所無し。必ずや射か。揖譲して升り下り、而して飲ましむ。其の争や君子なり）を踏まえた記述であろう。　12　**仁人は～給ふ**　孟夫子は孟子のこと。夫子は、長者・先生・賢者などを敬う語。ここは、『孟子』（公孫丑章句）の「仁者如射、射者正己而後発、発而不中、不怨勝己者、反求諸己而已矣」（仁者は射の如し。射る者は己を正しくして後に発つ。発ちて中らざるも、己に勝てる者を怨まず、諸を己に反求するのみ）を踏まえているのだろう。　13　**中正**　どちらにも偏らないで正しいこと。中庸。　14　**美人草**　「高忠聞書」の別称。『貞丈雑記』に『高忠聞書』について「後の人『美人草』と名づけたり。かの書を美人の如く秘蔵して人にみせず、という心にて名付けたりとぞ、云い伝うるなり」とある。『高忠聞書』は、小笠原持長（京都小笠原氏）に師事した多賀高忠が記した聞書。寛正五年（一四六四）の成立。　15　**日置**　日置流のこと。日置流は、日置弾正正次を祖とする弓術の流派。正次は戦国初期の人物で、吉田上野介重賢が正次から教えを受けた。以後は吉田家やその門人が日置流を伝え、江戸時代には各地に伝わって繁栄、弓術界の最大勢力となった。琉球への日置流の伝播については、康熙五十七年（享保三、一七一八）に越来朝慶の江戸立（江戸上り）に同行した糸嶺篤義が薩摩で東郷重依から伝受したことが確認できる（「薗姓家譜（糸嶺家）」『那覇市史資

料篇』第一巻八）。射術について記したこの「浮縄雅文集」の和文は一七二三年に執筆されたものと思われ、日置流が篤義に伝授されたのと同時期にあたる。その後、日置流は篤義の家で相伝されたようで、篤義の子孫である糸嶺篤孝が享和二年（一八〇二）に日置流の文書を書写し、八重山頭職である大浜親雲上に送ったものが「石垣家文書」に伝来している（『石垣市史　八重山史料集1』）。　16　**玉金**　不詳。弓術の流派か。「伊曽」「山本」も同じか。　17　**小笠原**　小笠原流は、武家故実、弓術、馬術などの流派。小笠原氏によって相伝。同氏は清和源氏を祖とし、南北朝期に信濃小笠原氏（本家）と京都の小笠原氏に分かれた。小笠原流を伝えたのは京都の小笠原氏で、室町時代中期には将軍の弓馬師範となった。　18　**由基げい**　照屋論文は「人物か。不詳」とする。「由基」は、中国の春秋時代の人物で、楚の弓の名人だった養由基を指すのだろう。「げい」は羿（げい）か。羿は中国古代伝説上の弓の名人。　19　**妖**　「わざわい」と読む。あやしげな祟り。　20　**神慮をすゞしむるゆへ**　「すずしむ」は清める、祭事を行なって神をなぐさめるの意。「石垣家文書」に伝来する日置流の「神道射術矢初」には「梓弓射タテマツリシ武士ノ心ハ神モウケサ（サ）ラメヤハ」という和歌が記されており、射術と神慮との関わりが窺える（『石垣市史　八重山史料集1』）。　21　**盛伝の雅丈**　雅丈は男子を敬っていう語。盛伝は伊舎堂盛伝のことか。伊舎堂は、雍正元年（一七二三）、雍正帝の即位を賀し、康熙帝を悼むための使者に任じられ、同年に那覇を出航した（「翁姓家譜（伊舎堂家）」『那覇市史資料編　第一巻七』）。盛伝が伊舎堂を指すのであれば、一七二三年の文ということになろう。　22　**錦着帰郷**　錦を着て故郷に帰る。立身出世して故郷へ帰る。　23　**ならし**　断定の助動詞「なり」に推量の助動詞「らし」の付いた「なるらし」の変化したもの。近世の文語の用法として、推量の意味を失い、「なり」の断定をやわらげた表現として用いる。

（屋良健一郎）

九

〈本文〉

[1]大工廻親雲上

いにしへの賢き人の伝へおかれしふみ、教へなくては誰れか明かならん。我[2]金先生、古今の才高く清廉にして、誰となくわかち給はねば、あ[3]げまきのわらはべまであふぎ慕ふもなか〳〵なれ。むかし三[4]舎のをしへもかくやとうちおどろきぬ。えらんで仁[5]に居らずばいかがはせん。さて去年の弥生の比より仮に我郷に草の庵をむすび、朝夕のたよりと仕させ、常にをこたりなく教へ給ひければ、昧（くら）き下官共も日々に新なる心地して、晴たる月に向ふがごとし。されば、今年のむ月より唐[7]の貢の文綴る司にさゝれて、其公にとて古郷に立帰り給ひぬ。あかぬ別れの名残を慕ひて、けふ此元にて何是を語らひ奉る席にかくなん。

月日

〈口語訳〉

大工廻親雲上

昔の賢い人が伝えおかれた文（漢籍）は、教えなくては誰が分かるのだろうか。わが金先生は、古今の才識が高く私欲のない人で、誰とも分け隔てなくいらっしゃるので、あげまきに結った年頃の子どもたちまで敬い慕うことはかなりのものであった。かつての三舎の学制による教えもこうであったのかと気付いた。自ら進んで仁の道を外れるとはどうしたことか。さて去年の三月頃から（金先生は）一時的に私の故郷に草ぶきの家をつくり、日々の糧と（私たちを）弟子におとりになり、常に怠ることなく教えなさったので、物事を知らない私達も

日々新しい気持ちで、照り輝く月に向かうような澄んだ気持ちであった。そんな折、今年の一月に唐への進貢船の文を綴る役職（漢字筆者）に任命され、その公務のために故郷の久米村にお帰りなさった。惜しむ別れの名残りを慕い、今日ここにて色々と語り申し上げる席にこのように参っております。

月日

〈注釈〉

1　**大工廻親雲上**　池宮正治は大工廻親雲上安詳とする。唐名毛文魁。乾隆五十六年（一七九一）生、咸豊元年（一八五一）卒。嘉慶四年（一七九九）八月、かぞえ年九才で、翌年の冊封使歓待の躍童子となった。嘉慶十一年（一八〇六）、尚灝の謝恩使として正使読谷山王子朝英について、楽童子として江戸に上っている。嘉慶十二年（一八〇七）元服、同年尚灝の冊封の準備のために躍人数に任ぜられる。嘉慶一七年（一八一二）、父の死によって美里間切登川地頭職になる。道光七年（一八二七）、尚育が摂政となったため、義村王子を薩摩へ遣わすこととなった。そのとき、与力として上国している。その後、砂糖座大屋子、寺社中取、普請奉行、八重山在番、小唐船才府、返上物宰領を歴任し、越来間切大工廻地頭職（一八五〇年）となる。沖縄三十六歌仙のひとりで、『沖縄集』（一八七〇年）には、和歌が一首おさめられている（池宮正治『近世沖縄の肖像 下』）。歌集『琉球国安詳詠草判』も遺されている。この文章の作者が安詳だとすると、『浮縄雅文集』の他の作者たちと比較して、後の時代の人であることは注意すべきである。　2　**金先生**　不詳。久米村の金氏か。　3　**あげまき**　少年の髪の結い方。髪を左右に分け、両耳の上に巻いて輪をつくり、角のように突き出したもの。　4　**三舎**　中国、宋代の神宗のときに定められた学制。国学にはいる者を、外舎、内舎、上舎の順に、次々と昇格させていく制度。　5　**仁に居らず**　「子曰、里仁為美、擇不處仁、為得知（子曰く、仁に里るを美しと為す。択んで仁に処らずんば、焉んぞ知なることを得ん）」（『論語』第四里仁）のことをさしている。仁に居るのが立派なことで、あれこれ選びながら仁をはずれるのでは、どうして智者といえようか、という教えをはずれることの意。　6　**味き**　くらい。物事を知らない。道理にくらい。　7　**唐の貢の文綴る司**　漢字筆者か。久米村の役職の一つ。〈文書書調方〉をその職務とする。表文、咨文、執照などの唐往来の文書を書写した（『大百科』）。池宮正治は大工廻自身が道光二十六（一八四六）年二月に進貢小唐船才府に任命されたことを指摘しているが、金先生が任命されたのだろう。

（綱川恵美）

十

〈本文〉

[1]伊是名筑登之親雲上

[2]一吉〳〵。此家や陰[3]に背き陽に向ひおのづから風水[4]の便によろしかるべし。後ろには緑樹茂ことをあらそへ[5]、松風琴の弾をなせり。まはりには色々の千種をうつし植たれば、折々咲萎む見所おほかるべし。所々に蘇鉄生茂りて松竹の雪に凋(しおれ)[6]ぬ色をあざむけ、園[7]には時を得たる薬種沢山なり。抑(そもそも)、此家を篩月亭(しげつてい)[8]と名づくめるは、遠く東の方崎[9]山の御園より巍々たる雨乞[10]の御嶽につゞき、この家の清澈[11]の泉のほとりにいたるまで生茂りたる千とせの色の松枝に明月の光をゆり出せるやうに見ゆ。まいて月[12]がしらには彎[13]月を居ながら窓前にながめ、積[14]れは人の老となるてふ古言をもわすれめづるこゝろのたえずいやまさればなるべし。又庭前にわざとつくりなせるやうの石の台あり。南に望めばかぎりなき風光いはんかたなし。遠山ものふりたる中に、辱(いやしく)も熊野

の権現跡をたれ給ふ識[15]名の宮居遙に見えて、森々たる松林魚提[16]松尾につゞく西の方をうちながむれば、馬歯[17]山、粟国、渡名喜の島々遠浦の景さながら眼前にうつりて砌の池にことならず。折節順風に帆をあげて那覇の湊に出で入る船をもまのあたりに数ふ。こゝにおゐてあるじ盃をあげて客に与て「いかにぞや」とほこる。おの〳〵猛然として答て曰、「むべなるかなや、園[18]には日々に渉て趣をなし、台には遠近のえならぬ佳景を目の前に運び、清澈の泉汲て芳茗[19]を煮る。こゝにしりぬ、此家や財を費さず、葺麗[20]をこのまずして、万物おのづから育す。かゝる風景にめで、千とせの齢ひ万歳にも及ぶべし。彼是取集ていはゞ、ずんとたから[21]〳〵。誠に造物者の無尽蔵」ともいはましかし。

すみなせる所ならずや此宿の老ずしなずの境とぞ見る

月日

〈口語訳〉

伊是名筑登之親雲上

一吉〳〵（不明）。この家は「陰」（北か）を後ろにし、「陽」（南か）に向かっており、自然と風水の条件が適当であるようだ。家屋の後ろには緑樹が競うように生い茂り、松風が吹き抜ける音は琴の音を聴くようである。家の周囲には様々の草々を移し植えているので、季節毎の花の盛衰を見る機会は多いようだ。所々に蘇鉄が生い茂り、雪に萎れない松竹よりも緑が勝って、園には時宜に適った薬種が沢山ある。そもそも、此の家を篩月亭と名付けるのは、遠く東方の崎山の御園から鬱蒼としている雨乞い御嶽に続き、この家の澄んだ泉の近くに至るまで生い茂った千歳を経たような松の枝が揺れるごとに、明るい月の光が洩れ出て屋敷に降りそそぐように見えることによる。その上、月初めには弦月を居ながらにして窓の外を眺めると（歌が思い出され）、月を愛でることを重ねるとそれとともに年をとっていくので、それはやめようという古言を忘れて、月を愛でる思いが一層勝っていくようである。又、庭前に特別に造ったような石の台がある。（そこから）南を遠く見ると、この上ない風光は言いようがない。遠くの山は由緒がありそうでその中にあって、もったいなくも熊野の権現が姿をあらわした識名宮が遠くに見えて、松林が鬱蒼としている魚提松尾に続く西の方を遠く見ると、慶良間島、粟国、渡名喜の島々の遠浦の景色がそのまま眼前に見えて庭の池の景色と重ねられて、遠浦の景色と違わなく見える。時に適った順風に帆を揚げて那覇の港に出入りする船も目の前に見えて、それをひとつひとつ数えることができる。ここにおいて、家の主は杯を上げて客にすすめて「この景気はどんなものだ」と誇る。それぞれは直ぐさま答えて言うには「本当だ、庭園は日々に応じて趣き深く、石の台に立つと遠近のすばらしい景色が次々と目の当たりに見られて、澄んだ泉を汲んできて御茶がたてられる。この屋敷にいて分かることは、此の家は費用をかけず、瓦を葺くような立派な家を造らずとも、すべては自然にそなわったものになっている。このような景気を愛でて暮らせば千年の齢は万年にもなるだろう。あれもこれもまとめていえば、これらはたいへんな宝だ、たいへんな宝だ。本当に造った主の限りない宝だ」と言うだろうよ。

この家は客である私が住処とできる所ではないが、この家のすばらしい景気故、ここは老いることも死ぬこともない境地でいられる所であると思われる

月日

〈注釈〉

1　**伊是名筑登之親雲上**　『詩歌集　那覇を詠う』那覇市文化局歴史資料室、一九九七年所収の「篩月亭の景色」（担当池宮正治）では、伊是名筑登之親雲上を『宮古島旧記』（『雍正旧記』一七二七年）の筆者、

「明有文・伊是名長良か」としている。ただし、『雍正旧記』ではなく『宮古島記事仕次』（一七四八年）の筆者である。『宮古島記事仕次』の序文には「在番筆者明有文長良　謹撰」と記載がある。池宮の記事は、稲村賢敷が「宮古島在番記」（『宮古島旧記並史歌集解』）の「乾隆十一寅（一七四六）ヨリ同十三辰年迄在番」に入れた「註」を受けていると思われる。『宮古島記事仕次』は他の『宮古島旧記』類（『御嶽由来記』『雍正旧記』『宮古島記事』）とは異なり、王府が地方に命じて作らせた文書ではない。しかも、文体（仲宗根家本）は和文（漢字・平仮名書き）である。『浮縄雅文集』の本文と『宮古島記事仕次』の筆者が、同一であるとするならば、『宮古島記事仕次』を理解する上でも重要な問題となる。　2　**一吉〳〵**　書簡の巻頭の言葉だろうが、不明。　3　**陰**　北か。続く「陽」は南をいうか。　4　**風水の便**　風と水による気の流れを操作する地理的な条件、都合が良いこと。『由来記』巻四によれば「風水地理」には康熙四年（一六六五）に在留通事として閩（中国福建）に滞在した周国俊が「地理」を学んで「風水見」を始めたと記されているが、それ以前に一六二九年に八重山川平村に漂着した浙江省台州府の人、楊明州によってもたらされたとされる（三浦國雄『風水・暦・陰陽師』）。しかし、さらに古い時期から琉球に入っている可能性が考えられる。琉球の風水は、主に都市や集落、屋敷や墓地の立地、景観を対象にしている。　5　**あらそへ**　「あらそひ」を見せ消ちして「あらそへ」としているが、「あらそひ」となるところ。「緑樹」が競い合って盛んな様をあらわす。　6　**凋ぬ色をあざむけ**　「凋」は本文では「啁」だが、文脈からしぼむ、しおれるとなるところ。また、「あざむけ」は「あざむき」となるところ。「あざむく」は、ここではそれよりも勝る意。　7　**園には時を得たる薬種沢山なり**　『球陽』尚育王三年（一八三七）の記事に「本年、御茶屋の間地に在りて薬種を栽植し、併びに瓦屋一棡を設け吏役公署と為す」がある。篩月亭は東苑よりも早くに「薬種」が栽培されていたということか。いずれにしろ、士族等の屋敷には「薬種」が栽培されていたことが想像される。「時を得たる」とは、その時々に適った効能がある、という意か。　8　**篩月亭**　「篩」はふるい、ふるって物をえりわけるのに用いる、竹などで編んだ底に目のある器具の意。この邸宅が松林に囲まれ、そこに月の光が松の枝を通して洩れ出でるたたずまいであることから名付けられている。　9　**崎山の御園**　首里城の東、崎山村にあり、東苑といわれた。また、俗に崎山御殿（ウドゥン）、御茶屋御殿などといわれた。詳しくは、三話「於御茶屋諸芸づくしの時」の注1参照。　10　**雨乞の御嶽**　首里崎山村にある御嶽。旱魃の際、国王が行幸して雨乞儀礼が行われた。　11　**清澈**　清く澄んでいること。　12　**月がしら**　月初め。対義語、月尻。　13　**彎月**　弓形をしている月。弓張月、弦月。　14　**積れは人の老となる**　在原業平の歌「おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの」（『古今和歌集』八七九、『伊勢物語』八十八段）をふまえている。歌の大意は、すばらしい月であってもいっこうに愛でたくない。愛でることが積もり積もっていくと、月日が重なり老人になっていくのでの意。　15　**識名の宮居**　識名権現のこと。『琉球神道記』第五に「尸棄那権現」（しきなごんげん）がある。「縁起亦明ナラズ。熊野神ト見ヘタリ。石窟惟（コレ）霊地也」とある。『由来記』巻十一には「姑射山神応寺」があり「南瞻部州、中山府南藩、姑射山識名、熊野三社大権現、弥陀・薬師・如意輪観音也」とあって、ここが明確に熊野権現を祀る霊地として記されている。同巻一「御参詣」に正月・五月・九月に吉日を選んで、弁財天堂・弁之嶽・末吉権現・観音堂・識名権現への「御参詣」があると記されている。　16　**魚提松尾**　「魚提」は那覇市繁多川にある「魚崎原」（「沖縄県市町村別大字・小字名集」）のことか。「松尾」は松林がある所をいう。　17　**馬歯山**　慶良間諸島（旧座間味間切・渡嘉敷間切）。　18　**園には日々に**

渉て趣をなし　本文「まはりには色々の千種をうつし植たれば、折々咲萎む見所おほかるべし」と対応する箇所。　19　**芳茗**　香りの良い茶。　20　**葺麗をこのまずして**　「葺麗」は瓦で葺くことをいうか。「このまずして」の「このむ」は、好むと理解してよいが、方言「kunu＝nuN　考案する。立案する。計画する」（『沖縄語辞典』）とも理解される。全体の意味は、瓦葺きの豪華な家を好まない、あるいは作らないの意。　21　**ずんと**　ぬきんでて（副詞）の意。また、方言（名詞）「ziNtoo　本当。真実」（『沖縄語辞典』）と関係する語か。

（島村幸一）

十一

〈本文〉

[1]添石親雲上

[2]翰墨の台にあそんで[3]入木の道をしり、むかしを汲、今を鑑見る事も、[4]鳥の跡を学んで公[5]につかふまつることも、いとありがたきためしなり。

（かたじけなく）忝も、今は清書を尊覧[6]に可備（そなふべし）との尊命を下されしこと、[7]不浅（あさからざる）御恵みとぞ感心し奉る。さればにや厲丹勤[8]、御用[9]にも相立度との願望にて候得ども、只心中に存るまで弁々と罷在候処、かくありがたき令命[10]を肝に銘じ、拙き我等も昼夜となく、尽精務[11]候得共、本より禿（とくひつ）筆[12]にして、其記（しるし）見えざる社（こそ）、残念至極奉存候。然ども、此程勤し功[13]あるゆへにや、聊（いささか）字形淳（すなお）に罷成、嬉しく奉存候。御厚恩有がたく、自今以後は、少の隙（ひま）をも惜み修練仕心底候。尚々僻墨削、奉仰ものならし[16]。

月日

〈口語訳〉

添石親雲上

文芸に親しみ、書の道を知り、昔の流儀を学び、今と照らし合わせて考えることも、文字を学んで王府にお仕え申しあげることも、実に有難い定めです。恐れ多くも、今は清書をご覧に入れるために調えよとの貴命を下されることは深い恩恵であると感じ入り申し上げます。そうであるからか、丹誠に職務に励み、御用の役に立ちたいと願うのだが、ただこれを心の内で思っているだけでいたずらに日を過していたところ、このようなありがたい命令を肝に銘じて、拙い私は一日中、精を尽くし務めていますが、もともと悪筆で、その成果が見えないのは、この上なく残念に思います。しかしながら、このほど精を尽くして修練を積んだことからか、わずかばかり文字の形が素直なものとなり、嬉しく思います。厚い恩恵は尊く、今後はわずかばかりの隙をも惜しんで修練に励みたいと心から思います。ますます拙い文字を削ぎ落とし、教えを請い申し上げます。

月日

〈注釈〉

1　**添石親雲上**　豊川親方正英か。唐名は伊世奇。三話の注2参照（三・七・八話に既出）。　2　**翰墨の台**　文事、文芸を弄する場所。「翰墨」は文筆。詩文を書くこと。　3　**入木の道**　書道。「入木」とは書聖といわれる王羲之が祝版（祭文）を書いたところ、筆力が強いため、木に書いた文字がしみこむこと三分にも及んだという故事による。　4　**鳥の跡**　漢語「鳥跡」による。唐の黄帝の代、蒼頡（そうけつ）が鳥の足跡を見て文字を創作したという伝承から転じて、文字の意。また、鳥の足跡の形から、流暢ではない拙い書きぶりの意にも用いられる。ここでは、文字の意。　5　**公につかふまつること**　添石親雲上は、乾隆十四年（寛延二、一七四九）に親方の位を授かり、添石親方となり、同年、添石から豊川に名乗りを改めている（三話の注2参照）。こ

の文章は、添石親雲上を名乗っていた一七四九年までの時期に書かれたものと推察される。　6　**尊覧**　他人を敬って、その人の見ることをいう語。高覧。　7　**尊命**　他人を敬って、その命令をいう語。御命令。　8　**厲丹勤**　丹誠に励み勤め。「厲」は「勵」（＝励）と同義。　9　**御用にも相立**　「御用に立つ」という慣用句。目上の人のために役に立つ。主君のために仕える。　10　**令命**　命令の意。　11　**尽精**　全力を出して努めるの意。　12　**禿筆**　「かぶろふで」「ちびふで」とも。穂先のすり切れた筆。自分の文、筆跡をへりくだっていう。　13　**功**　長い間の努力、修練、経験などの効用。　14　**ゆへ**　「ゆゑ」となるところ。故。　15　**僻墨**　照屋論文に「文章・筆跡をへりくだった言い方」とある。「僻」は正当でないさま、かたよったさまをいう。注12の「禿筆」も同意。　16　**ならし**　八話の注23参照。

（綱川恵美）

十二

〈本文〉

石嶺親雲上

爰に西氏公は、幼歳の時より壮年の比に及ぶまでは帝都に居住し、君につかひ奉り、勤労いみじくて、次第の昇進、人に勝れしかば、浦山ざるはなかりける。されども、功成名を遂て身退は天の道と心得、寿き傾けば、古郷なればとて、鄙のさしきへ遷居して年月を送り、春は野山の花を友なひ、秋はさやけき月を詠め、冬はさえゆく時雨の雲を見て、出雲八雲のいにしへより伝来る和歌を詠〔　　〕、浮世の事を与所にのみ見て、独楽をなし給ふ。予もそのむかしより心おきなく申せしかば、談まほしく侍るよし相催され、「われもおなじこゝろにおもふなり。さそふ水あらばいなん」とて、既にさしきにいたり、積るむかしを語る折柄、昔流を立し遊女、年はよれども、生来といふ。其名、世に聞えたるもの来れしかば、是ぞ一樹の蔭、一河の流、偏に天の与ふ他生の縁ぞかし。「ありしむかしをおもひ出し、一ふし唄、きかせたまへ」とすゝむれば、「狂人走ば、不狂人も走る習ひ」とて、三味せん取揚、「埋木の花咲事もなかれしに身のなりはてぞ哀なる」と涙を浮べ唄しかば、聞人見る人、「実に理」と共に袖をぞしぶりける。かくて夜もすがら、さま〴〵事終り、其明る日、帰るさにはやなれば「逢時に語り尽とおもへども別れになれば残る言のは」と唄ける其面影忘れがたく、遠く見返り、後髪をひかり、すゝみかねる道すがら一首、

面影の立そふ跡を見かへりて行も行れず遠近のみち

月日

〈口語訳〉

石嶺親雲上

さて、西氏公は幼年の時から壮年の頃までは帝都（首里）に居住し、国王に仕え奉り、勤労ぶりは目を見張るものがあり、順々に昇進していく様子は人より勝っていたので、羨まない人はいなかった。そうは言っても、立派な仕事をし、名声を得た後は身を退くのが天道に叶っている、と考え、老年になった時に、故郷ということで、鄙の佐敷へ移住して年月を送り、春は野山の花と暮らし、秋は清らかな月を眺め、冬は段々と冷えてゆく時雨を降らせる雲を見て、「八雲立つ」の歌が詠まれた昔から伝わって来た和歌を詠み、世間のことには関心を持たず、一人で楽しくお過ごしになっている。私も昔から心置きなく付き合ってきた仲なので、語り合いたいとのことで（西氏公が）声をおかけになり、「私も同じことを思っていたのである。誘いの水があれば行きましょう」ということで、すぐに佐敷に行き、積もる昔話を語る頃、昔、遊女として生計を立てていた者がおり、年はとってはいるが、まだ充

分な美しさや技量を備えているという。世間で評判の者が来たので、これこそ、知らない者同士が同じ木の下に身を寄せ合うのも、同じ川の水を汲んで飲むのも、ただ天から与えられた前世からの因縁、というようなものだ。「過ぎ去った昔を思い出し、一節、唄を聞かせてくだされ」と（私が）促したところ、（女は）「狂人が走れば、狂人ではない人も走ると言います」と、三味線を手に持ち、「埋もれ木に花が咲くことがないように、私も華やぐことなく、この身の最期は悲しいものである」と涙を浮かべて唄ったところ、聞く人見る人が「実に理に適っている」と共々涙で濡れた袖をしぼった。こうして夜通し、さまざまな事を終え、その明くる日、帰る時になったので「逢う時には語り尽すことができると思ったけれど、いざ別れの時になってみると言い残したことがあるものです」と女が唄ったその面影は忘れがたく、遠くから後を振り返り、後ろ髪を引かれる思いで、進みかねる道中で一首。

面影が離れないその方向を振り返って、行こうにも行けないあちら
　こちらの道

月日

〈注釈〉

1　**石嶺親雲上**　石嶺真忍か。真忍の唐名は麻篤敬、康熙十七年（一六七八）生、雍正五年（一七二七）に死去。康熙二十八年（一六八九）に父の死により喜屋武間切山城地頭職を継ぐ。同五十一年（一七一二）には西原間切石嶺の地頭となる。評定所筆者相付、評定所筆者を経て、評定所筆者主取や御右筆主取といった文書作成の責任者に昇っており、文筆に優れた人物であったことが窺える。康熙五十二年（一七一三）から同六十一年（一七二二）にかけては、評定所筆者主取・御右筆の先輩にあたる屋良宣易から書札礼（日本式の文書の書き方）を学んだ。（池宮正治『近世沖縄の肖像 上』）　2　**西氏公**　不明。　3　**帝都**　王城のある首里を指す。琉球の和文では首里を「都」と表現したものはあるが（平敷屋朝敏『貧家記』など）、帝都とするのは珍しい。　4　**君**　琉球国王のこと。「石嶺親雲上」が石嶺真忍であるとすると、尚貞（在位一六六九年～一七〇九年）、尚益（在位一七一〇年～一七一二年）、尚敬（在位一七一三年～一七五一年）などが考えられるか。　5　**つかひ**　仕え。この和文では、エ音となるべきところをイ音としているもの、イ音となるべきところをエ音としているものがいくつか見られる。琉球語が三母音であることが、このような表記に影響しているのであろう。　6　**功成名を遂て身退は天の道**　立派な仕事をし、名声を得た後は身を退くのが天道に叶っているという意味。『老子』九に「金玉満堂、莫之能守。富貴而驕、自遺其咎。功成名遂身退、天之道」（金玉、堂に満つれば、之を能く守ること莫し。富貴にして驕れば、自ら其の咎を遺す。功成り、名を遂げて身を退くは、天の道）とある。また、『曽我物語』五に「大名の下には、久居するべからず。こうなりとげて身しりぞくは天の道なりとて」とある。　7　**寿き傾けば**　「寿」は命、齢の意。老いることを意味する「齢傾く」と同義であろう。　8　**さしき**　佐敷。現南城市のうち。『おもろさうし』に見える地名。第一尚氏の祖となった思紹・尚巴志父子の居城と伝わる佐敷上（うう）グスクがある。佐敷間切の主邑として佐敷村があった。佐敷間切は、佐敷王子朝昌（後の尚豊）をはじめ、十七世紀には即位前の王子（佐敷王子）が領有、十八世紀からは、聞得大君に就任する前の王妃が佐敷按司加那志（あじがなし）として琉球処分まで領有していた。これとは別に惣地頭がおり、初めは佐敷、のち森山を名乗った。歴代の地頭として、佐敷親雲上興良方（雍建鼎）、佐敷親雲上紹基（温氏）、森山親雲上紹喜（温氏）などがいる。また、『由来記』によれば、佐敷間切の地方役人としては、地頭代の小谷大屋子、夫地頭の平田大屋子・与那嶺大屋子、首里大屋子・大掟・南風掟・西掟・佐敷掟・新里掟・手登根掟・屋比久掟・津波古

掟がいた（『地名大系』）。　9　**友なひ**　「伴ひ」のこと。連れて行く。10　**さえゆく時雨の雲**　「さえゆく」は段々と冷えてゆく、「時雨の雲」は時雨を降らせる雲の意。謡曲「山姥」に「春は梢に、咲くかと待ちし、花を尋ねて、山廻り。秋はさやけき、影を尋ねて、月見る方にと、山廻り。冬は冴え行く、時雨の雲の、雪を誘ひて、山廻り」とある。また、『平家物語』巻第十「藤戸」では、屋島に移った平家の様子を「むかしは九重の雲の上にて、春の花をもてあそび、今は八島の浦にして、秋の月にかなしむ。凡そさやけき月を詠じても、都のこよひいかなるらむと思ひやり、心をすまし、涙をながしてぞ、あかしくらし給ひける」と記す。後述のように、この石嶺親雲上の和文には他にも「山姥」や『平家物語』を踏まえていると思われる箇所がある。　11　**出雲八雲のいにしへ**　『古事記』所収の「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作る其の八重垣を」が和歌の初めとされることから、「八雲」は和歌を指す。「出雲八雲」も和歌を指す語で、『風雅和歌集』仮名序には「出雲八雲の色にこころざしをそめ、和歌の浦なみに名をかくる人人」とある。「出雲八雲のいにしへ」とは、ここでは、「八雲立つ」の歌が詠まれた昔という意味か。照屋論文は「出雲八重」と翻刻し、「出雲八重垣」のこととしている。　12　**与所にのみ見て**　「よそに見る」は、関心もなく見るの意。　13　**独楽**　どくらく。ひとりで楽しむこと。あるいは「ひとりたのしみ」と読むか。　14　**さそふ水あらばいなん**　誘いの水があれば行きましょう、の意。『古今和歌集』雑歌に「わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」（落ちぶれたこの身は根の絶えた浮草のようなものなので、誘いの水があれば行こうと思う）という小野小町の歌がある。なお、この歌には「文屋のやすひでみかはのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる」（文屋康秀が三河国の判官になって、県見（田舎を巡見すること）に行きませんか、と言ってきたことへの返事に詠んだ）という詞書がある。　15　**昔流を立し遊女**　「流れを立てる」は、遊女として生活するの意。　16　**生来**　生まれつきの性質や能力。ここでは、遊女が年をとっても昔と変らぬ容姿・技量を備えていることを指すか。　17　**来れしかば**　「来りしかば」か。　18　**一樹の蔭〜多生の縁**　知らない者同士が同じ木の下に身を寄せ合うのも、同じ川の水を汲んで飲むのも、前世からの因縁によるものだという意。『平家物語』巻第七「福原落」に「一樹の陰に宿るも、先世の契あさからず。同じ流をむすぶも、多生の縁猶ふかし」とある。また、謡曲「山姥」に「一樹の蔭一河の流れ、皆これ他生の縁ぞかし」とある。遊女が求められて唄うという展開も「山姥」の影響を感じさせる。　19　**狂人走ば、不狂人も走る習ひ**　人が他人と同様の行動をとりがちであることを意味する。『沙石集』に「狂人走らば不狂人走ると云へる如く、祖師皆、不狂人の走るなり」とある。　20　**埋木の〜哀なる**　「なかれし」は正しくは「なかりし」であろう。『平家物語』巻第四「宮御最期」に源頼政の「埋木の花さく事もなかりしに身のなるはてぞかなしかりける」（埋もれ木に花が咲くことがないように、私も華やぐことなく、身の最期は悲しいものである）という和歌がある。　21　**しぶり**　しぼり。「袖をしぼる」は、涙で濡れた袖をしぼること、ひどく悲しんで泣くこと。　22　**帰るさ**　帰る時。　23　**ひかり**　ひかれ。

（屋良健一郎）

十三

〈本文〉

武蔵[1]の国荏[2]原郡にて、[3]とらの年十二月十六日の夜書つけて、

屋富祖雅丈[4]に奉るならし　　源為一[5]

あふものはさだめて別るゝことはり、のがるべきにあらずとや。この

たび、[6]大君の御代がはりを祝ひ奉るとて、[7]うるま国の御主、はる〴〵と御使むさしの国までつかはし給ふて、[8]十一月中ごろより雪月のなかばまで、かの国人々に日毎にうち交りて物し侍りぬ。はや[10]古郷に帰り給はん日のちかづきぬる〔こそ〕[12]名残おしけれ。大君よりもいとまたまふてければ、留むべき事もかなはず

古郷にかへるたもとのうれしさをおもふ袖しもなにしぼるらん

あふべき事をまたとはちぎりをき侍れど、山川万里を隔たる国の住居の事になん侍れば、おもふ心にはまかせざらましかし。

月日

〈口語訳〉

武蔵の国荏原郡にあって、寅の歳（一七一〇年）十二月十六日の夜書いて屋富祖殿に送り申し上げた。　源為一

出会った者は必ず別れるのは道理であり、避けることはできないとか。この度、将軍様の御代がわりを祝い申し上げるといって、宇留間の国（琉球）の御主（国王）がはるばる遠くから使者を武蔵の国（江戸）までお使いなされたので、十一月中頃から十二月の中旬まで、彼の国の人々と毎日交際して文などを交わしました。早くも古里にお帰りになる日が近づくのが名残り惜しいよ。将軍様から帰国のお許しをいただいたので、引き留めることもできない。

貴方が古里に帰ることができる嬉しさを思うのだけれども、なぜか

袖には涙が零れて絞れるほどになっています

再会できるはずだと約束しましたが、山川万里を隔てた国に住まいがありますので、望みが適うことはないでしょうよ。

月日

〈注釈〉

1　**武蔵の国**　旧国名。現在の東京都、埼玉県と神奈川県の一部を含む。　2　**荏原郡**　武蔵国の郡のひとつ。多摩川下流の北岸から東京湾に面する一帯。現在の品川、大田、目黒、世田谷区にあたる。ただし、ここでは具体的には江戸の薩摩屋敷をさしているか。　3　**とらの年**　「とらの年」とは庚寅の年で、一七一〇年。この年は尚益王就任の謝恩使と徳川将軍家宣就任を祝う賀慶使が同時に派遣された。謝恩正使は豊見城王子尚祐（朝匡）、副使は与座親方毛文傑（安好）、賀慶正使は美里王子尚紀（朝禎）、副使は富盛親方翁自道（盛富）、総勢一六八人。島津吉貴に率いられた江戸立であった。琉球を七月二日に出発し、江戸に十一月十一日に到着、江戸に一ヶ月余り滞在して、江戸を十二月十八日に出発して、琉球に翌年の三月二十二日に到着している。「十二月十六日」は、江戸を発つ二日前にあたる。楽童児南風原里之子守生（「阿姓家譜（照屋家）」）の家譜によれば、十二月十六日に薩摩の芝御屋敷の表御書院で島津吉貴に拝謁し、帰国の許可をいただき「周信筆鴛鴦之絵一枚」を賜るとある。　4　**屋富祖雅丈**　「屋富祖」は賀慶使の一員「内証右筆附」の屋富祖親雲上董思恭仲辰か（佐渡山安治・横山学「琉球使節使者名簿」）。宮城栄昌『琉球使者の江戸上り』には、仲辰は「鹿児島において老中嶋津帯刀より書翰の改字を命ぜられてそれを果たし、さらに島津家臣で儒学に通じていた児玉宗因から唐法の諸礼を学んで、江戸での任務に尽くした。仲辰は詩人で書家であったが、祖父も筆跡に勝れ、御手判書御右筆の職に就いていた。父仲真も書家で、一六八二年（天和二）の江戸上りには右筆として参府した。江戸では島津光久から狩野養卜の山水の墨絵一幅を拝領している」とあり、『琉球人来朝関係書類』（二）には仲辰の漢詩一篇が記されているという。漢詩は「清渓流過碧山頭　空水澄鮮一色秋　隔断紅塵三十里　白雲紅葉両悠々」というものである。この一行に「通事」

として玉城朝薫がいる。「雅丈」は男子を敬っていう語。　5　**源為一**　日高治左衛門為一。『中山要案総論』（沖縄県立図書館東恩納文庫）に「薩陽御筆頭日高治左衛門為一」の名がみえる。屋富祖親雲上董思恭仲辰と日高治左衛門為一とは、それぞれの右筆として交流があったのだろう。　6　**大君の御代がはり**　徳川家宣が将軍に就任したことをいう。　7　**うるま国の御主**　「うるま国」とは琉球の歌語。「御主」は尚益王（在位一七一〇～一七一二年）のこと。　8　**つかはし給ふて**　前述したようにこの時は、謝恩使と賀慶使が同時に派遣されたが、文脈から徳川将軍就任を祝う賀慶使のことをいっているということになる。「給ふて」は正しくは「給うて」。注13の「たまふてければ」も「たまうてけれ」が正しい。　9　**十一月中ごろより雪月のなかばまで**　使節の一行は、江戸に十一月十一日に到着、江戸を十二月十八日に出発していることから、江戸滞在の期間を指していると考えられる。「雪月」は十二月のこと。　10　**うち交りて物し侍りぬ**　「物す」は広い意味があるが、「屋富祖」が「右筆附」であることを前提にすれば、書の遣り取りということか。　11　**古郷に帰り給はん日**　江戸を発つ十二月十八日のこと。　12　**〔こそ〕**　この箇所二字分空白になっている。虫食いがあるか。「こそ」を補う。「名残おしけれ」と係り結びになる。

（島村幸一）

十四

〈本文〉

[1]屋良親雲上

実(えげ)にや、「人の親のこゝろは闇にあらねども、子をおもふ道に迷ふ」とは、今こそ思ひしら露の、消る計のうき身のはて、誰に語らん、あさましや。比(いろ)は享保七、中華の都へ進貢[3]の舩を遣はされける時、[4]綸旨を蒙り北京[5]大筆者となり、霜月廿日[6]といひ六日、久米嶋をいで、既に浪風穏に、運の尽ぬるかなしさは、三十日の日倒れ、乗人(のり)数残らず水底のみくづと成たると。[8]ことし水無月八日、音信をきゝ、夢現ともわきまへず、家挙て長夜の闇となり、消入様にもだえこがれける。落るなみだの隙よりも、「有為転変・生死無常の理り、誰かしらざるべけれども、去年の春の暮、妻にをくれ、わすれがたみとおもひし独子[10]をかく旅に失ひ、かゝる果報つたなき身は、湯[11]とも水ともならばやとおもひ侍れど、流石又心にまかせぬ命にて、きのうふけふとながらひ、終に月日を送る事のはかなさよ。かほど、ある甲斐なき次第なれば、『世[12]の中のうさには神もなき物』といへば、さぞや仏神[13]三宝も見すてはてさせ給ふらん。浅ましや」と、ねてもさめてもおもへば〳〵、たとひていはんかたもなし。しかれども、「むかし孔子は鯉魚に後(おくれ)て、[14]おもひの火を胸にたく。白居易は子をさきだて、枕に残る薬を恨とかや。これらは聖賢・文道の大祖たり。我らがむねをこがす事、理ともいひつべし」と、やう〳〵心をいさめつゝ、書水茎(かく)に、[15]なみだながら一首、

おもひきやまつ甲斐なくて恨めしや長き別れになりはてんとは

かくうちなげき綴り侍りと、きくやいかに、康熙[16]皇帝去年の霜月御世を辞し給ひて、雍正[17]皇帝御践祚ましますといひ、是定たる天命のがるべき時節にあらじ。還而(かえりて)後の世まで名を残し、子葉孫枝のほまれともなるべき。その上、忝も皇帝御祭祠を手向させ給ひ、御当国におひても有験の高僧数[18]口に、重き御供養を仰付られければ、さもありがたき御法を得、たとひ業障[19]重くとも、仏[20]果菩提の身となり、則彼岸[21]にいたらんこと、何(なんの)疑のあるべきとおもへば、これはなげきの中の祝ひとおもひ一首、

すべらきのたうとかりける御法(みのり)得てはや彼岸(かのきし)にやすくいたらん[22]

享保八年癸卯七月十三日

〈口語訳〉

屋良親雲上

本当に、「人の親の心は暗闇ではないが、子を思う道に迷ってしまう」という和歌が、今まさに思い知られ、白露のように消えるだけのつらい身の行く末を誰に語ろうか、嘆かわしいことだ。時は享保七年（一七二二）、中国の都へ進貢船をお遣わしになった時、（わが子は）綸旨をいただき北京大筆者となり、十一月二十六日に久米島を出発し、まったく波風の穏やかな航海だったが、命運の尽きた悲しさには、三十日に船が転覆し、乗組員は残らず海底の藻屑となってしまったという。今年（享保八年）の六月八日、その連絡を聞き、夢とも現実と分からず、一家中が長い夜の闇に覆われたようになり、消えてしまうほどに悶え焦がれた。落ちる涙の絶え間に思うことは、「世は常に移り変わり、生死は無常だという理を知らないものはいないだろうが、去年（享保七年）の春の終わりには妻に先立たれ、妻の忘れ形見と思った一人っ子を中国への旅で失い、このように果報に恵まれないわが身は、どうとでもなってしまいたいと思いますが、さすがにまた、思うままにならない命なので、昨日今日と生き長らえ、結局月日を送るむなしさよ。これほどに生きていても甲斐のない現状なので、『世の中のつらいことに対しては神も何もできない』と言うので、さぞかし仏神三宝もお見捨てになっているだろう。情けないことよ」と、四六時中考えていると、他に譬えて言う言葉もない。しかし、「昔は孔子が鯉魚に先立たれて、悲しみの火を胸の中で燃やした。白居易は子を先に死なせて、枕もとに残る薬を恨んだとかいうことだ。彼らは聖人賢人で学芸の始祖である。我らが胸を焦がすのも道理と言うべきだ」と、どうにか心をはげましつつ書く筆で、涙ながらに詠んだ一首は、

思ったことがあったろうか、（我が子の帰りを待っても）甲斐がなくて恨めしいことよ。（中国への旅が）今生の別れになってしまうとは。

このように嘆き、歌を綴っていますと、もう聞いたかどうか、康熙帝が去年の十一月にご逝去なさって、雍正帝がご即位になさるというので、（私は）今、定まった天寿からのがれて死ぬ時ではあるまい。かえって後の世まで名を残し、枝葉のように増えた子孫のほまれともなるべきだ。その上、恐れ多いことに雍正帝は（進貢船の被害者ために）ご祭祀で死者の冥福をお祈りなさり、わが国でも有験の高僧数人に、厚い御供養を仰せ付けられたので、何ともありがたい仏の教えを得て、たとえ業障が重いとしても、善因によって仏となり、すぐに悟りの世界にいたることに、何の疑いがあるだろうと思うと、これは嘆きの中のよろこびと思い、詠んだ一首に、

国王（尚敬）のおかげですばらしい仏の教えを得て、早くも悟りの境地へとたやすく到達するだろう。

享保八年（一七二三）癸卯七月十三日

〈注釈〉

1　**屋良親雲上**　池宮正治は屋良宣易とする（「和文学の流れ」『池宮正治著作集3』）。宣易（一六五八～一七二九年）は唐名を湛令望と言い、和文学者として知られた人物。薩摩へ上国し右筆を勤め、進貢船などで中国へも渡った。康熙三十一年（一六九二）に北谷王子朝愛とともに上国した際、島津久洪より書礼法を相伝したとされる。筆者や祐筆の職を何度も務め、康熙五十二年（一七一三）には、宣易が学んだ書礼法を器量の人に伝授するように命じられた。その相手には石嶺真忍（一六七八～一七二六年）が選ばれている（真忍については十二話の注1参照）。真忍は、康熙六十一年（一七二二）まで宣易の指導を受けた。平敷屋朝敏は宣易の長女真鍋と禰覇親雲上朝文の間の子。宣易・真忍・朝敏の間には交流があったとされる（池宮正治『近世沖縄

の肖像 上』)。 2 **実にや～今こそ思ひしら露の** 謡曲『隅田川』に、「実にや人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふとは。今こそ思ひしら雪の」というほぼ同文の表現がある。「人の親のこゝろは闇にあらねども、子をおもふ道に迷ふ」は、藤原兼輔の和歌、「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰和歌集』一一〇二)による。 3 **進貢の船** 琉球が朝貢していた中国(清朝)に派遣した渡唐使節の内、貢期に従って派遣された船。頭号船(大唐船)と二号船(小唐船)とがあった。 4 **綸旨** 尚敬王の命令書。「綸旨」の上に二字分空白あり。平出か。 5 **北京大筆者** 進貢船の乗組員のうち、進貢のために北京へ赴く官員の一人で、上京に伴う事務方の総責任者。大唐船に乗船した(宮島壯英「唐船(進貢船・接貢船)に関する覚書」)。池宮正治は屋良宣易の次男宣富とする(「和文学の流れ」『池宮正治著作集3』)。 6 **霜月廿日といひ六日** 享保七年(一七二二)十一月二十六日。『歴代宝案』に康熙六十一年(一七二二)十一月三日の「国王尚敬の、進貢の表」(2-12-06)「国王尚敬より礼部あて、進貢の咨」(2-12-09)あり。「進貢の咨」に耳目官毛弘健・正義大夫陳其湘・都通事蔡垣らを二船に乗船させ派遣したとある。 7 **乗人数残らず水底のみくづと成たる** 『歴代宝案』によると、雍正元年(一七二三)五月十九日、中国から尚敬王に対して進貢船(頭号船)の沈没が報告されている(「福建巡撫より国王尚敬あて、進貢の頭号船の沈没と二号処置及び頒賞についての咨」2-13-01)。その報告には、「琉球国の進行使臣毛弘健等坐する所の頭号船内の表文・人員・方物は倶に礁に衝りて覆没す」とあるが、沈んだのは頭号船で二号船は無事だった。『球陽』巻十一によれば、波と暴風のため、二号船の官員は頭号船の乗船者を助けられなかったとされる。この時の被害者は天久崎に祭られた。 8 **ことし水無月八日、音信をきゝ** 享保八年(一七二三)六月八日。尚敬に沈没の報告があったのは同年五月十九日(注7参照)。その情報が宣易の耳に入るまで間があったか。 9 **有為転変・生死無常の理り** 因縁によって生じるこの世の現象は常に移り変わり、人の生死は無常であるという道理。 10 **独子** 一人っ子。屋良宣富を指すとされる(注5参照)。ただし、宣富は次男。先年に没した妻の子は一人だけということか。 11 **湯とも水ともならばや** 白隠禅師慧鶴(一六八五～一七六八年)の「壁訴訟」に「迚も死すべき途なれば、怨念の箭一つ射つけて、湯とも水ともなるべしと思ひ定め」(『白隠禅師法語全集』)とあり、同全集の注では、「どうなろうとままよ」の意とする。ここでも、どうとでもなってしまいたい、の意味か。 12 **世の中のうさには神もなき物** 世の中のつらいことに対しては神も何もできないものを、の意味。『平家物語』巻第八「緒環」にて、平宗盛が宇佐八幡に参籠した際に得た夢想の告げの歌、「世のなかのうさには神もなきものをなにいのるらむ心づくしに」による。謡曲『清経』にも引かれる。 13 **三宝** 仏・法・僧のこと。仏と、その教えを記した経典と、それを広める僧を指す。 14 **むかし孔子は鯉魚に後て～聖賢・文道の大祖たり** 謡曲『天鼓』の以下の記述によるか。「伝聞孔子は鯉魚に別れて、思ひの火を胸に焚き、白居易は子を先立てて、枕に残る薬を恨む、是皆仁義礼智信の祖師、文道の大祖たり」。「鯉魚」は孔子の子の鯉(字は伯魚)を指す。「白居易は子をさきだてゝ、枕に残る薬を恨」は、唐の詩人の白居易(七七二～八四六)が、娘の金戀子の死を嘆いた漢詩の「残薬尚頭辺」の句による(『白氏文集』巻十四「病中、哭金戀子」)。 15 **水茎** 筆のたとえ。もしくは筆跡。 16 **康熙皇帝** 一六五四年生、一七二二年十一月三日没。名は玄燁、廟号は聖祖。清の四第皇帝で、一六六一年から六十年間帝位にあった。多くの業績を残し、清朝の基礎を固めた人物。 17 **雍正皇帝** 一六七八年生、一七三五年没。名は胤禛、廟号は世宗、康熙帝の第四子。清の五代皇帝で、一七二二年に即位。 18 **数口** 数人。 19 **業障** 悪

業によって生じた障害。　20　**仏果菩提**　仏となる善因を修めて悟りを得ること。　21　**彼岸**　悟りの世界。　22　**すべらき**　「すめろき」「すめらぎ」とも。和語では天皇のこと。ここでは尚敬王を指す。

（小此木敏明）

十五

〈本文〉

[1]飛花落葉の風の前に有為の転変をさとり、雷光石火の光の中には生死の去来を知るとかや。されども夢[2]の中間の世の中は、無明業障[3]の尽あつて、長夜の暗（やみ）[4]に迷ひ、いつまで[5]草のいつまでも、たゞ[6]ありかほの挙動こそ歎の中の歎なれ。爰に麻氏真忍[7]は、幼比より専（もつぱら）父母に孝養を尽し、壮年の比に及より、朝庭[8]に仕へ奉り、忠勤まことくもり[9]なりしかば、褒賞[10]年の重り、官禄[11]ともにいやまさりしかば、羨ざるはなかりけり。されども、道前離苦[12]の理り、生死の掟を誰かはのがるべき。比しも、雍正[13]五年ひのとの未四月初比より、たゞかりそめに風[14]の心ちと悩みける定業[15]の病ひは祈に所なし。医（いす）[16]るに薬草、験（しるし）なく、水無月[17]十九日と云、甲斐なく身まかり給ひしかば、家挙てしばし消入給ひける。そのほか親族隣家に至るまで、袖[18]をしぼらぬ人ぞなし。さてかくあるべきにあらざれば、次廿日[19]野辺の葬営ける。実にや世にありし時、人の交深く、情過さぬ人にてありしかば、貴賤[20]群集して野辺の送りをさもねんごろになし給ふ。見る人、聞人、実に理りとぞかんじける。就中、我若比よりふかき契りをなし、跡や先の事どもまで頼けるに、た[21]のむ木の本に雨露漏て老のむねをぞこがしける。やう〳〵涙を押へつゝ、六字[22]の哥を綴り、霊鑑[23]に侍るものならし。

南　存命（ながらえ）てわするときしもなき跡におもひ出てやそでぬらすらん

無　むざんやな[24]をくれ先立習ひなるをしらぬがほなるわがなみだか

な

阿　あさましやかくあるべしと知るならばふかき契を成ざらましを

弥　道しらぬ死[25]出の山路を踏わけてこゝろ〔　ほそ　〕くもひとりゆく

覧

陀　頼むしく法[26]の灯火明らかにわたるもやすき遠き彼岸

仏　仏神何祈らん極楽の道しるべなるふかき誓[27]に

大清雍正五年乙未六月二十三日

〈口語訳〉

春咲く花もやがて散り、青葉も秋になれば色が変わって散る、風を前にして、この世の無常を悟り、雷光石火の光の中に生と死がたちまちに去来するのを知る、などというようである。しかし、夢のようにはかないどっちつかずにあるこの世は、無明にもとづく業のさわりが極まり、長い夜の暗闇にさまよい、いつまで草のようにいつまでも、（死者が）ただ何か言いたそうな様子こそ、この上なく嘆かわしい。ここに麻氏（石嶺）真忍は、幼い頃よりもっぱら父母に孝養を尽くし、壮年の頃より、王府にお仕えなさり、忠義を尽くして勤めること実に明らかであったので褒賞を受け、年を重ね官禄ともにますます立身出世なさったので、誰でもが羨ましく思っていた。しかし、仏道を修める前に苦しみを離れることの道理、つまり生死の掟を誰が逃れることができようか。時まさに、雍正五年（一七二七）四月のはじめごろから、ただ軽い風邪の様子で苦しんでいたが前世から定まっている業報の病は祈っても快復する余地がない。病気を治す薬草も効き目がなく、六月十九日だったそうだ、甲斐なくお亡くなりになったが、家中がしばらく悲しみにしずみなさっていた。そのほか親族や隣家に至るまで、涙で袖を絞らない人はなかった。しかし、そうしているわけにもいかず、翌二十日に野辺送りを行った。本当に生前、人とのつきあいが深

く、情を忘れぬ人であったので、身分の高い者も低い者も寄り集まり、野辺送りを手あつくなさった。それを見る人も聞く人も本当に道理であると感じた。特に、私は若い頃より（真忍と）深い約束を交わし、後のことやこれから先の事までをも頼んでいたのだが、頼りにしていた木の元から雨が漏れるように、年老いた私の心はひどく傷悴した。なんとか涙を押さえつつ、「南無阿弥陀仏」の六字の歌を綴って、神仏にご照覧いただくものである。

南　生きながらえて忘れようとしても、またあなたの亡くなった後を思い出して、また袖を濡らすのだろう。

無　不憫なことであることよ。ある者は生き、ある者は死ぬのが世の常であることをそしらぬふりして流れる私の涙よ。

阿　嘆かわしいことであるよ。このようになると知っていたならば、深い約束を交わすことはしなかったのに。

弥　道を知らない冥途にある険しい山を心細くも一人で進んでいくことだろう。

陀　頼りになる仏法の灯火が明るく照らしているので、遠いあの世まで渡るのもたやすいことであるよ。

仏　仏神に何を祈るというのか。極楽浄土への道しるべである深い誓いをするにあたって。

大清雍正五年乙未六月二十三日

〈注釈〉

1　**飛花落葉～知るとかや**　謡曲「柏崎」に「つらつら世間の幻相を観ずるに飛花落葉の風の前には有為の転変を悟り、電光石火の影のうちには、生死の去来を見ること」とある。「電光石火」が「雷光石火」、「影のうち」が「光の中」という違いはあるが、ほぼ同じ表現である。「飛花落葉」は、春咲く花もやがて散り、青葉も秋になれば色が変わって散るという意。はかない世のたとえにいう。「有為の転変」は世の無常のこと。因縁によって生起した一切のものの移り変わり。　2　**夢の中間**　中間は「ちゅうげん」と読む。仏語。二つのものの間にあるもの、間に考えられるもの。　3　**無明業障**　無明にもとづく業のさわり。「このかたの無明業障の恐ろしき病」（蓮如「御文」文明六年）。　4　**長夜の暗**　仏語。衆生が真理に暗く、生死流転して闇黒の生活を続けることを、長い夜にたとえる。　5　**いつまで草のいつまでも**　いつまで草は木蔦の異名。いつまでもの意。　6　**ありかほの挙動**　有顔。（何かが）いかにもありそうな顔つき。死に顔が今にも目覚めそうな様子をいう。　7　**麻氏真忍**　麻氏石嶺真忍のこと。十二話の注1参照。康熙十七年（一六七八）生、雍正五年（一七二七）に死去。真忍が亡くなったときの弔いの文。作者は不明であるが、十四の作者、屋良親雲上である可能性が高い。真忍は、屋良宣易の弟子となり、書札礼を学んだ。　8　**朝庭**　朝廷。王府。　9　**くもりなりしかば**「くもりなかりしかば」となるところ。くもりなくあったので。　10　**褒賞**　王府時代に善行を推奨するために定めた賞。　11　**官禄**　官位と俸禄。　12　**道前**　仏語。真の道をさとる以前の位。　13　**離苦**　仏語。苦難を離れること。　14　**雍正五年ひのと未四月**　一七二七年四月。　15　**風の心ち**　風邪のようす。　16　**定業**　じょうごう。仏語。前世から定まっている業報。　17　**医る**　「いする」。病気をなおす。痛みなどをやわらげる。　18　**水無月十九日**　『麻姓家譜　支流　石嶺家』によると、石嶺真忍の逝去は「雍正五年丁未六月十九日卒享年五十號仁岳」とあり、本記事と一致する。『麻氏兄弟たち』雍正五年の記事に、「六月二十日（中略）は、丁度歌人石嶺真忍葬式の日であった。享年五十」とある。　19　**袖をしぼらぬ人ぞなし**　涙でぬれた袖を絞らない人はいなかった、の意。　20　**野辺の葬**　遺体を埋葬場までつき従って送る儀礼。　21　**貴賤群集**　身分の高い者も低い者も寄り集

まること。　22　**たのむ木の本に雨露漏て**　頼みにしていたのにあてがはずれること。『兼盛集』「天の原くもればかなし人しれずたのむ木のもと雨ふりしより」（七）。　23　**六字の哥**　「南無阿弥陀仏」の六字を歌の頭にして詠む歌。識名盛命『思出草』の中巻には四つの弔いの文章が収録されており、そのうちの「亡父の十三回忌をとぶらふ詞」の文章にも、南無阿弥陀仏の六字を頭にして歌を詠んでいる。　24　**霊鑑**　神仏の照覧すること。神仏が霊妙な力でご覧になること。　25　**をくれ先立ち**　「を」は「お」となるところ。おくれ先立つ。ある者は生き残り、ある者は先に死んでいく。死別する。　26　**死出の山路**　死後の世界にある険しい山。冥途。「この世にてかたらひおかんほととぎすしでのやまぢのしるべともなれ」（『山路集』七五〇）。　27　**こゝろ**〔ほそ〕**くも**　「こゝろ」の後に二字の空白あり。後から横に「ほそ」と傍記してある。　28　**法の灯火**　仏法を闇を照らす灯火にたとえた表現。「ねがはくはしばしやみぢにやすらひてかかげやせまし法のともし火」（『新古今和歌集』一九三一、釈教・慈円）。　29　**誓**　仏語。誓願。仏や菩薩が、衆生の苦しみを救おうという誓い。　30　**大清雍正五年乙未六月二十三日**　年記が、中国年号で記されている文章は、『浮縄雅文集』の中ではこの文章だけである。

（綱川恵美）